

の作品のイラストも数多く担当している。『Drummer Harry 鼓手、ホフ』(一九六七)で一九六八年度コールデコット賞受賞。物語の内容に応じて、木版、インク、鉛筆といった、さまざまな画材や技法を採用している。

(金平聖之助)

エンライト エリザベス Elizabeth Enright 一九〇九～六八 アメリカの児童文学作家。挿絵画家として出発したが、一九三五年ごろより文筆活動に入る。や

がてウイスコンシンの少女の農場生活を、風物を織り交ぜて挿話ふうに描いた『農園の夏』(一九三一八)でニユーベリー賞を受ける。そのほか『The Sea is all around 海に囲まれて』(四〇)、『The Saturdays 土曜日』(四一)などがあり、地方色豊かな家庭物語の系譜に入るものが多い。『農園の夏』の本邦初訳は、戦時中の一九四一年。

(原 昌)

オイレンシュピーゲル テイル Till Eulenspiegel 一五世紀半ばから一七世紀末にかけて民間に流布した民衆本の一つである同名の笑話集の主人公で、人気のあるいたずら者。一四世紀前半に活躍したとされ、墓石も記念博物館もあるが、実在したかどうかは確実でない。もとは低地ドイツ語のテキストが高地ドイツ語に訳されたのは一五一五年で、笑い話の内容は多くことばの遊びである。この素材は何人の芸術家の興味を惹きつけて、作品に結実した。

(関 楠生)

及川甚喜

じんきわ

一九一五八一(大4)昭56

編集

才

黄金伝説 Legenda Aurea イタリア生まれのヤコブス・ド・ヴォラギーネ(一一三一〇～九八)による『聖者伝』(出版年不詳)の俗名。キリスト以来の聖者・殉教者の伝記が逸話風にまとめられており、広くヨーロッパの文学作品、とくに児童文学や他の説話集(たとえば『アラビアン・ナイト』などの素材となつたり影響を与えたため、一般に「黄金伝説」と呼ばれるに至つ

者、詩人、児童文学作家。岩手県生まれ。法政大学卒業後の一九三八年六月に、小学館に入社。「少国民の友」ほかの編集長を歴任。四七年に退社後、一時学習研究社にフリーの身分で在籍する。はじめ詩人として出発し、『牛飼ふ村にて』を「国四年生」(四二)に発表。戦後、詩と童話を集めた『東京の猫』(四八)、三「四年向き童話集『こいぬとバラ』(五八)などを出版した。

(五十嵐康夫)

た。

(三宅忠明)

「童苑」に発表した短編『風信器』によつて第三回児

童文学者協会新人賞を受賞。以来新聞や雑誌に作品を書き続け、六三年「たのしい六年生」に書いた『見えなくなつたクロ』で第一二回小学館文学賞を受賞。この年受賞作などを含めた短編童話集『少年のこよみ』を出版し、編集者と作家の生活を続けるが、六年小峰書店を退職、文筆生活に入る。主な作品に『駅長さんと青いシグナル』(一九六五)、『チヨコレート戦争』(六五)、『さとるのじてんしや』(六八)、『教室二〇五号』(六九)、『たたかいの人』(七一)、『ぼくたち縁の時間』(七三)、『ミス3年2組のたんじょう会』(七四)、『魔女のいる教室』(八〇)などがあり、その集大成として『大石真児童文学全集』(全一六巻)がある。代表作として長編の『教室二〇五号』と中編の『チヨコレート戦争』をあげられるが、前者は子どもへの愛情よりも物欲にうつを抜かす大人、受験戦争にむしばまれていく子どもたち、さらには交通事故、親子の断絶、子どもの家出、身障者への思いやりといったシリアルなテーマを描きながらドラマティックで、感動的な文学にしあげている。後者は洋菓子店のショーウィンドーを割つたと疑われた子どもたちが店の看板を盗み出したり、不買運動を起こしたりして大人と戦うというストーリーだが、子どもの内面を鮮やかに描いて面白く読める。いずれもロングセラーとして、今も子どもたちに

大石

眞
まこと

一九二五 (大14)

(石川松太郎)

一一世紀後半(平安後期)より一九世纪後半(明治初年)に至るまで、数多くつくられて広く手習われた初步教科書。略して往来ともいう。もともと進状・返状の往返一对の手紙模範文・模型文をいくつも収録した手本を意味して、平安貴族の藤原明衡作と伝えられる『明衡往来』を嚆矢とするが、室町時代から江戸時代を経て明治期にかけては、手紙文体に限らず、和漢混淆文体・記事文体・韻文体・散文文体で書かれたものでも、初步教科書・教材用につくられていれば、すべて「往来」と呼ばれるようになつた。とくに江戸時代に入り、一般庶民の家庭や寺小屋での学習熱の高まりと出版技術の向上とが重なりあって、つくられる往来物の種類は激増し、普及の範囲が拡大した。今日に判明しているもののみで、道徳・社会・語彙・消息・地理・歴史・産業・理数の各分野にわたり七〇〇〇種にも達している。そしてこれらのうちには、童話、童謡など当時の児童文学と深くかかわつてつくられたものが少なくない。

(石川松太郎)

作家。埼玉県に生まれる。早稲田大学英文科卒業。在学中より早大童話会に入り、卒業後、小峰書店に入社。編集者生活のかたわら同人誌「びわの実」などに童話を発表する。一九五三年早大童話会二〇周年記念号の

読み継がれている。大石真の作品はファンタスティックな童話であつてもストーリーの巧みさに加えて、心理主義アリズムの裏づけがあり、それが子どもたちの共感を呼ぶことになる。

〔教室二〇五号〕^(一〇五) 長編児童文学。一九六九年。

秘密の地下室で結束される四人の子どもたちの友情。足の悪い友一のために飛び箱を練習させる健治と洋太の努力。それにこたえて見事に五段を飛んだ友一。さらには点取り虫であつた友一が人間らしさをとりもどしていき、下級生である明の勉強を見てやるまでに成長する。大人の常識とはかわりのない子ども同士の人間的触れあいを感動的に描き出す。きびしい現実を描きながら作者の冷静な目とヒューマニズムがその感動を支えている。

(西本鶴介)

大井冷光^(おおい れいこう) 一八八五—一九二二(明18—大10)

雑誌編集者、童話作家。本名信勝。富山市生まれ。農学校を卒業して富山日報の記者となり、郷土伝説に取材した『越中お伽噺』を刊行したが、一九二一年上京、久留島武彦の早蕨幼稚園に勤め、嚴谷小波の木曜会に出席。一二年には時事新報社に入り安倍季雄の後を受けて「少年」「少女」の主筆となり、創作・再話などを発表、口演童話にも力を尽くした。著書に『母のお伽噺』(一九二二)がある。

(稗田董平)

大海 赫^(おおうみ あかし) 一九三一—(昭61) 児童文

学作家、画家。東京、新橋で生まれたが幼少より病弱で、画家になるのが夢であった。早稲田大学仏文科を経て、同大学大学院仏文研究科に進み、ベルグソン哲学『喜劇の美学』について考察した。卒業後も独自に青葉研修塾を開いていたが、やがて童話を書き始め、自作に自ら絵も描くようになつた。一九八一年に洗礼を受けた。作品はSF風で心暖まるものが多い。作品に『クロイヌ家具店』(一九七三)、『びんの中の子どもたち』(八三)などがある。
(中村祐子)

おおえひで 一九二一—(大1—) 児童文学作家。本名大江ヒデ。長崎県西彼杵郡高浜村に生まれ、高等小学校卒。一九歳の時上京、独学で専修合格、東京都の保育園の保母となる。小説家大江賢次と結婚後、四〇歳になるころ児童文学の創作をはじめる。動機は長崎の原爆で死亡した姉と子どもたちのことなどを文字にして書き残しておきたいという祈りからである。処女作『南の風の物語』(一九六二)は中編三作から成り、第五回未明文学賞奨励賞を受賞。『八月がくるたびに』(七一)も、被爆の悲惨さを子どもの目を通して描いた戦争児童文学の代表作であり、第二〇回小学校文学賞を受賞、一九八三年にはスウェーデン、デンマークに語訳が出版された。ほかに『ベレ帽おじいさん』(六三)、『海べの小さな村で』(七八)、『浜ひるがおの花が咲く』

(八五)などがある。郷里長崎地方を舞台に方言を交じえた語り口の文体で、懸命に生きる庶民の姿を温かく描いている。

(深谷禮子)

大川悦生

えおかわ

一九三〇～(昭5～)児童文

学作家、民話研究家。民話を語る会主宰。一九五三年早稲田大学文学部仏文科卒業。早くから日本の昔話の再話に意欲を示し、伝承的な民話を児童文学としてどう継承し発展させるべきかを課題とした。著作に、「おかさんの木」(八二)、「大めしくいの八やん」(七五)、「日本民話読本」(六六)、「現代に生きる民話」(七五)など多数がある。

(堀尾幸平)

大木惇夫

おおき

一八九五～一九七七(明28～昭52)詩

人。本名軍一。筆名篤夫のち惇夫。広島市生まれ。広島商業学校卒業後、銀行員を経て博文館に勤務。夜間、正則英語学校高等科に学ぶかたわらアテネ・フランスでフランス語を習得し、ヴエルレーヌに傾倒。植村正久から受洗。一九一六年ごろから詩作をはじめ、小田原に住んだことから北原白秋の知遇を得て第一詩集『風・光・木の葉』(一九二五)を出版。日本抒情詩の正統派詩人で、詩集『危険信号』『失意の虹』や、白秋の伝記小説『天馬のなげき』、翻訳『基督の生涯』などがいる。児童文学の面では、「赤い鳥」に「鍛冶屋の腰掛」(一五)、「金の鳥の胃袋」(二六)などの童話を、「少女の友」「少女世界」に少女詩を発表。「絵画世界幼年叢書」

一四編や『日本児童文庫44 世界名作詩選』などの翻訳も多い。『新日本児童文庫11 宝窟探検記』(三四)、『少女小説夢みる瞳』(四九)を執筆。

(谷悦子)

大木実

おおき

一九一三～(大2～)詩人。東

京都墨田区に生まれ、八歳で生母と死別。電機学校中退。少年時代から、北原白秋、西条八十、野口雨情などの童謡に親しみ、長じて、佐藤春夫、室生犀星、フリップなどの作品に傾倒した。雑誌「牧神」や「冬の日」の仲間に加わり、一九三九年第一詩集『場末の子』を上梓。四二年『四季』の同人となる。詩集に『屋根』(一九四一)、『故郷』(四三)、『路地の井戸』(四八)、『冬の仕度』(七一)、『夜半の声』(七六)などがある。一方、少年少女のための詩集『未来』(四八)、『近代詩鑑賞』(五八)、『詩を作ろう』(六〇)、『美しい詩を作った人たち』(六二)によって近代詩を子どもたちに紹介した功績は大きい。庶民の生活感情を温かいヒューマニスティックな目で捉え、それを平易なことばで描いた抒情詩に特長がある。作品には、彼特有的もの悲しさが漂うが、結局は人生を肯定的に位置づけている。

(鈴木敬司)

大木雄二

おおじ

一八九五～一九六三(明28～昭38)

児童文学作家。本名雄三。群馬県に生まれる。郷里で小学教師をしたのち上京、作家生活に入る。「文明公論」などに小説を発表、児童雑誌「新少年」に少年小説を

執筆し、以後、童話、少年小説、伝記、民話などを書き、多彩な活動をした。一九二六年童話作家協会が結成され、その翌年小川未明の紹介で入会、のちに同会役員に選ばれた。三五年童話集『紙芝居』を出版し代表作の一つになった。戦後幼年童話の創作に力を傾げて、『なきむしうさぎ』（一九五二）、『すすめのてがみ』（五四）などの短編集があり、当時一般にはまだなかつた長編の幼年童話『くろすけあかすけ』（四九）を出版。

高学年向け作品では『月夜の馬車』（四九）、『花にかこまれた家』（四九）がある。また体験的児童文学史の『童話を書いて四十年』（六四）では大正昭和の児童文学史の一断面と文壇人への追想が興味深く述べられている。

（久保喬）

大久保正太郎 一九〇七～八四（明40～昭59）国文学者、児童文学者。茨城県稲敷郡古渡村（現桜川村）生まれ。一九二七年茨城師範一部卒業。文検合格。国文学者西尾実に師事し上京して高等女学校教員ののち、岩波書店に入社、中等国語教科書の編集をする。

四三年同盟通信社、日本少国民文化協会に勤め、四年新世界社を興し「子供の広場」ほかの児童雑誌を発行した。歴史物語の編著書『日本古典名作選』（一九五四）、『少年少女のための日本歴史』（六三）のほか国語問題の論文がある。

（来栖良夫）

大倉桃郎

（おおくらとうろう）

一八七九～一九四四（明12～昭19）

小説家。本名国松。香川県生まれ。日露戦争で満州各地を転戦中に、「大阪朝日新聞」に応募の小説『琵琶歌』（二九〇五）が最優秀作となり、文名があがる。一九〇七年ごろ、万朝報の記者となり、通俗的な家庭小説、歴史小説を書き続ける。一四年以降は万朝報を退社し、著作に専念。「少女俱楽部」などの常連執筆家として、『おや星子星』（二七）など少年少女小説を多作した。

（北吉郎）

大蔵宏之 一九〇八～（明41～）児童文學作家。本名新蔵。奈良県生まれ。関西大学専門部中退。大阪市東区史編纂係を経てNHKに勤務し、学校放送部長として活躍。一九三六年にはじめて童話を書き、横木楠郎に見てもらう。のち岡本良雄らとの同人誌『新児童文学』に掲載り、「天忠組ものがたり」（一九四二）、『お父さんの戦友』（四三）を出版。戦後は『戦争つ子』（五八）、『ぼくは負けない』（六四）、『朝の太陽』（七二）などの作品がある。

（五十嵐康夫）

大阪童謡芸術協会

（おおさかどようげい）

一九三五～四四年（昭10～19）、詩・音楽・舞踊の一体化による童謡の総合的発展と普及を目的に豊田次雄、木坂俊平などが中心になって結成した団体。主に関西地方の詩人、作曲家、舞踊家が参加して、舞踊講習会の開催、童謡のラジオ放送、詩集の出版などの事業により童謡の立体化・大衆化に力を注いだ。機関誌「童謡芸術」を八年

間に七九号刊行するとともに、『童話芸術年刊集』全二冊（三八、四〇、四二）を出版し、小春久一郎、恩地淳一、森たかみちをはじめ多くの詩人を巣立たせた。

（畠中圭二）

大阪童話教育研究会

（昭7）一九三二年

（昭7）九月一八日、大阪府立女専講堂で発会式を行つた。会長には、当時府立女専の校長であつた平林治徳

が選ばれた。大阪中央放送局で子ども番組を担当していた足立勤や古田誠一郎らが中心になつて活動した。

設立目的は、「童話教育ノ研究トソノ普及ヲ圖ル」ことになつた。三三年（昭8）一月、機関誌「子供と語る」を創刊。誌名にあるように本会のいう童話教育とは、「語り聞かせる」童話を中心に考えられた。童話作家協会と共に催して「日本新人童話賞」を設け、童話作家への大きな刺激となつた。第一回の受賞作品は、岡本良雄の『八号館』、第二回受賞作は、下畠卓の『大河原三郎右エ門』であつた。四〇年八月二二日から二四日までの三日間、奈良・樅原建国会館で行われた「全日本童話教育大会」は、本研究会の最大行事とされる。「幼い子供の心の糧としては、子供と語る心をもつて、純美な国語で話されるよい童話ほど必要なものはあるまい」が大会趣意であつた。

（大澤昌助）
大澤昌助
（おおさわ しょうすけ）一九〇三（明36）—洋画家、童画家。東京芝に生まれ、一九二八年東京美術学校西

洋画科を卒業。三八年二科展出品作により「コドモノクニ」より依頼され、以後児童出版関係に絵を描き、確かなデッサン力を特徴とし、中尾彰、脇田和らとの分野に新風を送る。戦後は教科書なども執筆、活躍したが、六五年ころより二科会委員として洋画壇で活躍、その抽象的色面構成は定評がある。絵本に『うさぎうさぎなに大好き』など。

（久保雅勇）

大関松三郎

（昭19）一九二六—四四（大15—昭19）

詩人。新潟県黒条村で、農業、大関仁平次の三男として生まれる。一九三三年黒条小学校に入学、寒川道夫の指導を受ける。四年マニラ通信隊に赴任の途中、南シナ海で雷撃を受け、船と運命をともにする。五年寒川道夫の編集によって、当時の詩作品が『山芋』としてまとめられ、そのうちの『虫けら』などは教科書にも採用され、戦後「児童生活詩」復興の大きな役割を果たした。

（畠島喜久生）

太田黒克彦

（昭19）一八九五—一九六七（明28—昭42）

児童文学作家、随筆家。熊本市に生まれ、済々黌中学を中退し上京、『メザマシドケイ』（「コドモノクニ」）を発表した一九二一年、雑誌記者として中央公論に入社。その後文筆生活に入り、四二年随筆集『水辺手帖』出版。戦後、魚介・動物を擬人化し生態を描く、動物児童文学の一分野を拓く。四七年『小ぶなものがたり』（野間児童文芸奨励賞）、五七年『マスの大旅行』（サンケ

イ児童出版文化賞奨励賞)のほかに『しんじゅの家』(一九五九)、『山ばとクル』(六二)などがある。(草野明子)

太田三郎 さぶろう 一八八四—一九六九(明17—昭44)

西洋画家、挿絵画家。愛知県に生まれ、白馬会研究所にて黒田清輝に師事。雑誌「はがき文学」の編集に携

わつていわゆる「鉛筆」を描きはじめ、油絵画家のほか挿絵画家としても知られる。小品画集『ひこばえ』(一九一四)や鉛筆集『蛇の殻』(一五)があるほか、文筆にも長じており、「鍾情夜話」(一八)などの著書がある。児童向きの仕事では、鹿島鳴秋文による絵本叢書『オハナシ』(一三)の挿絵が優秀。

(岡田純也)

太田大八 だいはち 一九一八—(大7-) 画家。長

崎県に生まれ、多摩美術学校を卒業、絵本、児童書の挿絵で活躍。油彩から墨彩、版画まで幅広い画風は、

重厚なものから軽妙なタッチのものまで変化に富む。

『馬ぬすびと』(一九六八)、『かじかびようぶ』(七五)、

『なんげえはなししつこしかへがな』(七九)の挿絵に代表されるように、歴史もの・民話絵本に力量を發揮している。仏画や絵巻の描法を取り入れた『絵本玉虫厨子の物語』(八〇)は絵としての完成度が高く絵本にっぽん賞に選ばれた。また、文字なし絵本『かさ』(七五)は墨一色で傘だけ赤く彩色し、色のイメージを鮮明にしたことと、アングルを大胆にえて心の動きまで捉えたとして高い評価を得た。日本童画会賞(五五)、小学

館絵画賞(五八)、国際アンデルセン賞国内賞(六九)、国際アンデルセン大賞オーナーリスト(七〇)、IBA国際図書芸術展金賞(七七)など受賞多く、現在、名実ともに絵本界の第一人者。児童出版美術家連盟理事。

(佐々木純子)

太田博也 ひろや 一九一七—(大6-) 児童文学

作家。東京都に生まれる。一九三三年、童話雑誌「お

話の木」に風刺童話を発表して、小川未明に認められる。三七年「日本の子ども」の編集に携わる。未明に師事し、空想とユーモアに富んだセミファンタジー的な作品を多く書き、無国籍童話の先駆者といわれたが、

その根底にはキリスト教精神が流れしており、一貫して、人間が存在する上で何が一番大切なあらゆる角度から追求し、普遍性に富むテーマを描き出した。無国籍と評される主な原因はこのへんにある。代表作に『ドン氏の行列』(一九四二)、『ボリコの町』(四八)、『日本キリスト教児童文学全集』第九巻(八二、教文館版に収載)、『風ぐるま』(五五)がある。また、賀川豊彦に強い影響を受け、老人社を設立して人々の和解を図つたり、全国刑囚友の会の代表者として人権守護運動を展開するなど実践面でも活躍を続けている。この方面的著書に『生きている死者—死刑囚は訴える』(六六)がある。

(大久保みどり)

大田洋子 ようこ 一九〇三—六三(明36—昭38) 小説

家。本名初子。広島市に生まれ、広島進徳女学校卒業。昭和初期「女人芸術」を舞台に作家活動を開始し、私

小説風な恋愛もの得意としたが、一九四五年広島で原爆被爆。以後は『屍の街』（一九四八）、『人間禪樓』（五一）などで、原爆の惨状の記録と告発に全力を注いだ。戦後間もない時期は少女小説にも筆を染めた。非運な少女たちが明るく生きる姿を感傷的に描いた『ホテル白孔雀』（四九）などがある。

（江刺昭子）

大塚講話会 一九一五年（大四）創設の童話研究団体。創設者は下位春吉、葛原幽。はじめ学生の文化的クラブ活動であったが、卒業生が増えるにつれ、OBをも加えた団体となり、戦前は主として口演童話の研究と実演に当たっていた。校内での児童会のほか、東京市内外の幼稚園、小学校、中学校などに出かけて実演をし、子どもを楽しませた。とくに学生がチームを組んで全国各地の口演旅行を試みることが多く、大正年代から昭和戦前期にかけ、数百回の巡回口演を行っている。北は北海道、樺太（現サハリン）などをはじめとして、九州、沖縄、国外では上海、台湾、朝鮮、満州（現中国）の各地に及んでいる。講話会といつて童話会と呼ばなかったのは、いわゆるおとぎ話ではなく、「教師たるもののが教壇に立つて話をする基本的な心構えと基礎訓練」を重んじようとした会創設の精神による。『実演お話集』全九巻（一九二一～三）のほか、『実

演童話新集』全六巻（三六～三七）、『実演お話新集』全三巻（五四）がある。

大塚勇三 一九二一～（大十～） 翻訳家。

旧満州国の生まれ。東京大学法学部卒。一九五七年平凡社に入社し六六年退職。主としてドイツ、北欧の児童文学の翻訳、紹介に努める。主な訳書は『長くつしたのピッピ』（一九六四）などリンドグレーンの主要作品、プロイスクラーの作品の邦初訳である『小さい魔女』（六五）、『グリム童話集』（六九）。また、モンゴルの民話の絵本で評価が高い『スホホの白い馬』（六七）の再話もしている。

大坪草二郎 一九〇〇～五四（明三三～昭二九） 歌人、小説家。福岡県生まれ。本名竹下市助。歌人として出発し、一九二一年「アララギ」に入り、島木赤彦に師事。著書に『雲水良寛』（一九二二）、『短歌初学』（三九）、『良寛の生涯とその歌』（三九）、『人間西行』（四〇）などがあり、児童向に『良寛さま』（三〇）、『続良寛さま』（三九）、『日本の子供たち』（四〇）、『からくり儀右衛門』（四四）、『鬼の面』（四九）などの著書がある。

（五十嵐康夫）

大中寅二

（おおなかじい）

大中 恩**めぐみ****一九二四（大13）**

—作曲家。

東京に生まれ、東京音楽学校作曲科卒業。作曲家の父

大畠末吉**おおはた****一九〇一（明34）**

昭53

（早川史香）

学者、翻訳家。埼玉県生まれ。東京大学文学部独文学科卒業。専門はゲーテ研究であるが、ドイツおよび北欧の児童文学の翻訳も多数手がける。訳書に岩波文庫版『アンデルセン童話全集』全10巻（一九三八～四五）のほか、矢崎源九郎、山室静らと編集・翻訳を行った『アンデルセン童話全集』全8巻（六三～六四）で、一九六五年に第一回サンケイ児童出版文化賞大賞を受賞。

大中寅二に師事。子どもの歌と合唱作品を数多く作曲している。子どもの歌には、詩人阪田寛夫とのコンビによる『サツちゃん』『おなかのへるうた』をはじめ、『いぬのおまわりさん』『トマト』『しらないこ』『わからんちゃん』など多数の作品がある。また一九五五年以降、アマチュア合唱団コール・メグ主宰し、その演奏を目的として数々の作品を発表している。主な作品に『わたしの動物園』『月と良寛』『煉瓦色の街』『愛の風船』『遙かなものを』『島よ』などがあり、国内の合唱団のレパートリーに加えられていることが多い。

このほかにミュージカル作品『鬼のいる二つの長い夕方』『イシキリ』『さよならかぐや姫』などもある。作曲家として活動するかたわら、各地の合唱団への客演指揮も多く行っている。（ろばの会）所属。（大畠祥子）

大野允子 一九三一（昭6）児童文学作家。広島県加計町生まれ、一九五四年広島大学文学部卒業、以来一〇年間高校勤務。かたわら広島地方の同人誌「子どもの家」で創作を続け、六二年同同人ら

とともに『つるのとぶ日』を出版。以後、処女作『海に立つにじ』（一九六五）、『夕焼けの記憶』（七三）などを書き、学徒動員として郊外で労働中に原爆災禍を見た一人として原爆と戦争の問題を問い合わせ続ける。また、郷土広島、搖らぐ少年少女の心を主な題材とした作品系列もある。

大藤幹夫 一九三六（昭11）児童文学研究家。大阪市に生まれ、大阪学芸大学卒業後、小学校教員となり、のち大阪教育大学大学院修了。武庫川女子大学を経て大阪教育大学教授。大学在学中より同人誌「児童文学研究」に拠って活動を開始し、卒業後「OCL」（大阪児童文学会）を創刊。作家研究では宮沢賢治を中心に小川未明、浜田廣介などの論文がある。著書に『日本児童文学史論』（一九八一）、編著に『展望日本の児童文学』（七八）そのほかがある。（藤本芳則）

大村主計

おかむら
かずえ

大和田建樹

おおわだ
たけき

オカカスタ

岡 一太

おか かずた

一九〇三—八六(明36—昭61)

児童

文学者、劇作家、エスペランティスト。岡山県窪郡三須村(現総社市)に生まれる。岡山市の私立関西中学卒業。母校の校長の主宰する雑誌「ミカド評論」の編集者をし、同校の作文の講師を務める。早くからエスペラントを学び、同郷の横本楠郎の影響もあって、プロレタリア児童文学に関心を深め、一九二八年に結成された新興童話作家連盟に参加。二九年、「戦旗」の付録として出された「少年戦旗」に童謡『憎いこん畜生』を発表、その後、同誌のほか「童話運動」「新興文芸」「プロレタリア音楽と詩」などに童謡を発表。それらの作品は横本楠郎、川崎大治編集のプロレタリア童謡集『小さい同志』(一九三二)に収録される。プロレタリア・エスペラント同盟(P.E.U.)を結成、中央委員として活動、弾圧を受け逮捕される。戦後は母校の図書館の司書のかたわら、児童劇や童話を精力的に発表。児童劇『歌をわれらに』『緑の星の下に』などが知られ、著書には『人生案内』(六五)、『希望の歌』(七〇)、『明日への旅立ち』など自伝的な少年小説や、エスペラント

児童文学の翻訳などがある。日本エスペラント学会の小坂賞(五三)や、久留島武彦文化賞を受賞。追悼文集『緑の星と輝いて』(八七)がある。

(富田博之)

岡田 阳 (おかだ あきら) 一九二三(大12) 演劇研究家、劇作家。鳥取県米子市に生まれ、一九四二年玉川学園卒業。四六年より玉川学園教師となり、中学部部長、高等部部長を経て玉川大学文学部教授。この間演劇教育の実践・研究、劇作に多くの業績を残し、クリエイティブドラマの研究・指導などにも幅広く活躍する。主著『岡田陽学校劇選集』(一九五六)、『演劇と舞踊』(六四)、『ドラマと全人教育』(八五)。共訳書『子供のための創造教育』(七三)など。

(生前嘉治)

岡田 純也 (おかだ じゅんや) 一九三九(昭14) 評論家、児童文学研究家、読書運動家。旧満州国に生まれる。

立教大学大学院文学研究科修了。在学中に福田清人の指導を受け、早稲田文学社が刊行した『少年文庫』(一九〇六)の研究に取り組み、『少年文庫』について一過

渡期の児童文学』を立教大的学内誌『日本文学』に発表。児童文学とかかわる。主な仕事に『宮沢賢治人と作品』(六八)、『児童文学と読者』(七四)などがある。現在、京都女子大学教授。

(畠山兆子)

尾形 裕康 (おがた ひろやす) 一八九七(一九八五明30) 昭60

教育学者。本名鶴吉。福島県信夫郡金谷川村に生まれ、早稲田大学文学部史学科を卒業(一九三〇)、宮内省図

書寮編修官・東京国立博物館調査員などを経て、早稲田大学教授。日本教育史を専攻、実証的な手堅い調査研究により『日本の胎教』(四六)、『中世の芸能教育』(五二)、『我国における千字文の教育史的研究』(六六、続編七八)などを著し、日本児童文学史の基礎ないし補完資料の検討に重要な業績を遺した。

(石川松太郎)

岡田 八千代 (おかだ やちよ) 一八八三(一九六二明16) 昭37

劇作劇評家、小説家。筆名、芹影女。小山内薰の妹。広島市生まれ。一九歳で处女作『めぐりあひ』を『明星』に発表以来各雑誌に執筆。代表作は戯曲『黄楊の櫛』(一九一二)、小説『新緑』(〇七)、隨筆『若き日の

小山内薰』(四〇)など。夫、岡田三郎助の大作『支那絹の前』の美しきモデルもある。児童劇團芽生座を一

九二二年に創立。解散まで八年間の運営、脚色、演出に携わった。童話劇『忘れられた人形』(二五)、『童話』は芽生座の第四回公演に上演。

(森下真理)

岡上 鈴江 (おかのえ すずえ) 一九一三(大2) 児童文

学翻訳家、作家。小川未明の次女として東京に生まれ、日本女子大学校英文学科卒業。外務省勤務を経て著述生活に入る。父未明を娘の立場から描いた、隨筆『父小川未明』(一九七〇)、『父未明とわたし』(八二)、児童書『陽だまりの家』(八六)があり、未明研究の資料としても貴重。創作童話に『スウおばさん大好き』(七七)、翻訳にバーネット『小公子』、エリオット『妹マギー』

など多數ある。

岡野薰子

おかの
かおるこ

（昭41）児童文

（棚橋美代子）

学作家。東京農業教育専門学校附設女子部を卒業後、教師、科学雑誌の編集を経て、一九五四年以降スライドの原稿執筆で活躍した。六一年より児童文学の活動をはじめ、六四年には長編『銀色ラッコのなみだ』を発表し、注目を浴びた。幼少時より芽生えた優れた観察眼をもとに、動物を主人公にした作品を発表、主なものに『ボクはのら犬』（一九六五）、『カモシカの谷』（六六）、『ももいろのひよこ』（七〇）、『砂時計へ短篇集』（七〇）、『坂の上のグミ屋敷』（七二）があり、八二年に著者の長年にわたる小さな生きものとの出会いをつづったエッセイ集『私を呼ぶ自然の仲間』を出した。

岡野の作品を単に動物文学のジャンルにだけ組み入れてしまう安易さは誰もが指摘する通りである。この作家は自然の驚異や美しさを、誠実で謙虚な観察生活から、熟知した上で、自然や動物を愛する分、野生の何たるかを追求し、動物と人間がどこで対峙すべきかを学んできているようと思える。それが作者をして「動物を物語に介在させることによって、別の角度から人間をみることができないだろうか」という境地に立たせ、一作ごとに人間の世界をみつめる深さへとつながっていく。「じかんのもたらす変化は、時間の流れをところどころ中断させて、それをつなぎなおしてみる

とはつきりする。」（『ゆめとふりこ』あとがきより）と述べているように、スライドや映画制作技術で鍛えた経験がものをいつて、場面や時の移行、その神秘さを描く腕は逸品である。「自然をもぎとる形でしか人工のものをとり入れることのできない日本の貧しさ」を痛感しながら作品を発表し続ける作者に共感を覚える読者は多いはずである。

『銀色ラッコのなみだ』（ぎんいろラッコのなみだ） 長編童話。一九六年。ここでは主人公のラッコ銀色とその一族、および友情を交わしたエスキモー少年ピラーラを軸に、自然の地に文明が入り込んで生み出された悲劇が語られる。作者はピラーラと銀色のみに個性を与えて、文明と自然の間に生まれる軋轢をシンボリカルに描こうとしている。

（島式子）

岡野 薫子

おかの
かおるこ

（昭17）長編童話。一九六年。

西洋画家、挿絵画家。東京青山に生まれ、東京美術学校西洋画科を卒業、さらに白馬会に学ぶ。女子学習院などに教鞭を執りつつ油絵に精進、一九一一年に中沢弘光らと光風会を創立。明治末より児童出版物の挿絵を描きはじめ、いわゆる飼絵をやや図案化したような画風に特長があつた。巖谷小波文による絵本叢書『日本一ノ画嘶』（一九一五）や『お伽画帖』（〇八）、鹿島鳴秋

オカノテイイ

文による絵本叢書『オハナシ』(一三)などの仕事が優れていた。

(岡田純也)

岡野貞一

(おかの
ついいち)

国文科中退。かつてプロレタリア詩人会に所属。戦後、詩誌「ポエム」(一九四八)を刊行、新詩人同人、新日本文学协会会员となつた。詩集に『ごろすけぼう』(二九)、『蟹』(三五)、『窓』(六四)、『山鳩』(七九)、『光にむかつて』(八一)など。童話集『竹馬』(四二)ほかもある。

長くみのる幼稚園を経営、逝去まで園長を務めた。

(尾上尚子)

岡本一平

(おかもと
いつへい)
一八八六—一九四八(明19—昭23)

漫画、漫文家。函館に生まれる。父は明治初期の有名

な新聞記者岡本可亭。四歳で両親とともに上京、京橋

で育つた。一九〇五年に東京美術学校西洋画科に入学。

夏目漱石に見いだされて一年に朝日新聞社に入社、

漫画記者として各界の人々の似顔漫画に健筆を振るつ

た。一四年に『探訪画趣』を刊行し、その描く漫画は、

政界、社会、家庭、探訪、芸能と多岐にわたつてゐる。

子ども漫画としては、『珍助絵物語』(一九一七)、『良友』、

『平気の平太郎』(一八)、『良友』などがあるが、これら

は子ども漫画集『平気の平太郎』(三二)として一冊にまとまつてゐる。この本は『複刻絵本絵ばなし集』(七八)に入つてゐる。岡本一平は、内外の漫画をまとめたり、

車の絵を描き、文学と漫画の結合の先駆とし、成功した。

(北川幸比古)

岡村 民

(おかむら
たみ)

人。長野県上高井郡(現長野市若穂町)生まれ。日本大学

大成されている。なお最初の妻は作家となる岡本かの子で、息子は岡本太郎である。

(石子 順)

岡本帰一

（おかもと きいち）

一八八八～一九三〇（明21～昭5）

童画家。淡路島に生まれ東京で育つた。黒田清輝主宰の白馬会洋画研究所に学び、デッサン力に優れ頭角を現す。のちに白馬会を去つて岸田劉生、木村荘八、高

村光太郎らと一緒にヒューレン会を結成、創作版画などを出品して新しい絵画運動を起こす。小山内薰の自由劇場にかかるわり、舞台美術に興味をもつ。一五年富山房刊行の『模範家庭文庫』で楠山正雄の『アラビアンナイト』、『グリム御伽噺』の装丁と挿絵を手がけデュラックやラツカムに影響を受けた独特的スタイルを完成。さらに一九年創刊の『金の船』（のちに『金の星』と改題）の表紙や挿絵を描く。このころ楠山正雄の紹介で島村抱月の芸術座の舞台装置を担当し注目される。芸術座解散後は畠中蓼坡、長田秀雄と新劇協会を起こし、二〇年有楽座で上演した『青い鳥』の装置と衣裳を手がけて成功、舞台美術における先駆的業績を残した。二二年『コドモノクニ』創刊で絵画主任に迎えられ、童画家として本格的な活躍の場を得る。二七年に武井武雄、清水良雄らと日本童画家協会を結成、その後の子どもの本の挿絵芸術の発展に指導的役割を果たした。暖色を基本とした大胆な配色と丸味を帯びたしなやかな描線で子どもの動きを的確に表現、舞台

美術の経験による劇的な構図で物語性に富んだモダンな画風を確立した。童画集に『岡本帰一傑作集』第一集（一九三一）、第二集（三四）があり、絵本に『おともだち』（二八）、『ボクノリヨカウ』（二九）などがある。

(松居 直)

岡本良雄

（おかもと よしお）

一九一三～六三（大2～昭38）児童

文学作家。大阪市北区安治川に生まれる。一九三八年早稲田大学文学部国文科卒業。三三年に早大童話会に入会小川未明に傾倒した。三五年早大童話会機関誌『童苑』を創刊、『トンネル路地』を発表。坪田譲治を訪ね早大童話会顧問就任を懇請。三六年榎本楠郎の『新児童文学理論』から強い示唆を受け、横本をしばしば訪れる。三七年小川未明を訪ねる。三八年卒業論文『童話作家小川未明論』が『国文学研究』第一〇集に掲載される。同年に大阪に帰る。『北川千代論』『安治川つ子』『八号館』などを執筆する。四二年に第一童話集『朝顔作りの英作』、四三年第二童話集『八号館』を発表。師事する人物よりも分かるように、戦前の岡本良雄の作品の根底には民主主義思想が流れ、創作方法はプロレタリア児童文学、生活童話に基づきつつも、リアリズム童話を独自の手法で書いていた。四三～四五年の軍隊生活の後、岡本は児童文学者協会の創立发起人をはじめ民主的児童文学運動での活躍をはじめる。少年少女の広場』の編集同人を経て、『ラクダイ横丁』『イ

「モシズカニ」、「あすもおかしいか」、「けんきうちのホーミラン」などの作品を敗戦直後に発表した。作風は、戦後民主主義の確立を一方ではめざしつつも、他方では、戦後の時代でもまだ多くの人々が引きずっている前近代的な意識や生活感覚を鋭く批判するものであつた。岡本良雄が、そこで最も強調しているのは、ヒューマニズムの大切さ、重要さであり、ヒューマニズムをもとにした生活の場での人間のつながりや生活の場での不正や弾圧との闘いを作品のうちに描き出した。登場する子どもたちは、そのために、それぞれが主体的に現実にぶつかり、自らの手で人間に大切なものをつかみ取るという、大人と対等な人間として描かれている。岡本良雄は、五六年『アンクル・トムさん』、五七年『三人の0点くん』では、日本の軍国主義復活を憂慮しつつ社会的ヒューマニズムにも目を向けている。

〔トンネル路地〕トネル 短編童話。一九三五（三六）年「童苑」に発表。子どもたちの遊び場である長屋の路地を舞台にした作品である。子どもたちのいたずらや遊びなどの日常生活を作品は描き出す。そして、彼らの日常にまで入り込む戦争の問題、印刷工場の鉛毒の問題、大きな店に押しつぶされる小さな店の問題など、子どもたちの毎日の生活に関係ある社会問題へと視点を当てる子どもの像、平和と民主主義を願う子どもの

気持ちを描いている。

【参考文献】大藤幹夫「猪野省三解説」（一九七八『日本児童文学大系30』ほるぶ出版）

（大岡秀明）

岡 落葉おちよう 一八七九（一九六二）（明治12～昭37）

（大岡秀明）

画家。本名恵介。とくすけよう 山口県平生町に生まれる。オランダの医者シーカー・ホルトの長崎鳴滌塾頭、岡研介の後裔。国木田独歩の弟収二と平生小学校で同窓だった。山口中学で学び一九歳で上京、画家を志し独歩と起居をともにした。独歩の『小春』の画家は落葉をモデルにしたものである。独歩の『武藏野』の装丁や「近事画報」の挿絵で知られ、また、明治末から大正初期の少年少女雑誌に、抒情的な口絵や挿絵を描いた。（福田清人）

小川信夫おがわ 一九二六（）（大正15）劇作家。

神奈川県津久井町に生まれ、一九四八年神奈川師範、五二年日本大学経済学部卒業。川崎市の小学校教諭、指導主事、学校教育部長などを経て同市教育研究所所長。

この間、斎藤喬に師事して『うぐいすの鳴く峠』（日本児童劇作家協会賞）、『霧』などの学校劇脚本を数多く書く。児童劇脚本やラジオ、テレビの脚本も多い。著書『小川信夫少年演劇作品選』（一九八四）、日本児童劇作の会副会長。

小川未明

おがわ

（生越嘉治）

オカワミメイ

オカワミメイ

小川 隆太郎おがわ りゅうたろう 一九一〇(明43) 詩人、児童文学研究家。京都府宮津市宮本に生まれる。大阪・池田師範学校卒業後、府下の小学校に勤務、生徒指導方教育運動に力を尽くした。一九二八年から「赤い鳥」に童謡を投稿、「胡麻畠」はじめ入選作多数。第二次「新児童文学」同人として活躍。小学校退職の後は、大阪文学学校で児童文学講座を担当、後進の指導に当たる。「関西アララギ」編集同人、主著に『世界の昔話』(一九五四)、『日本の昔話』(五四)がある。

沖井 千代子おさこ ちよこ 一九三一(昭6) 児童文學作家。本姓高橋。愛媛県に生まれる。県立広島女子専門学校国文科卒。一九五六、『婦人朝日』の特別懸

(大藤幹夫)

賞童話に入選したことがきっかけとなつて童話を書きはじめる。N H K 中国本部の放送脚本・上演台本を執筆するかたわら、坪田譲治に師事して「びわの実学校」に作品を発表。代表作に広島県の民間伝承に取材した『ひばだこがんばる』(一九七五)、原爆を描いた『歌よ川をわれ』(八〇)など。

(横川寿美子)

沖野岩三郎 (おきのいわさぶろう) 一八七六—一九五六(明9—昭31) 小説家、評論家、児童文学作家。和歌山県日高郡寒川村の生まれ。私生児としての出生であった。高等小学校中退後、山林労働や村役場勤務を経、一八歳で和歌山師範に入学、卒業後九年間小学校教師をする。教師時代はトルストイを愛読し、「明星」に投稿を続けた。一九〇二年日本基督教會和歌山教会で洗礼を受け、〇四年上京し、明治学院神学部に入学。そのころから社会問題に関心をもち、賀川豊彦らと非戦論を唱えた。卒業後日本基督教會新宮教会に赴任した。一〇年幸徳事件が発生して、新宮教員の大石誠之助が巻き添えになり、その余波は牧師の沖野にまで及んだ。連座を免れた彼は、大石以下の被告と家族らの救援活動に励み、のちにこの体験を長編小説『宿命』(一九一八)に描き、「大阪朝日新聞」の懸賞小説に応募(二等当選)した。一七年新宮教会を辞し、上京。日本ユニテリアン系の牧師となるが、三年後牧師職を辞め、以後文筆に専念する。小説集に『煉瓦の雨』(一八)、『渾沌』(一九)、

『私は生きてゐる』(二五)などの幸徳事件もののほか、『生れざりせば』(一四)、『いづこへ行く』(三三)が、評論に『宿命論者のことば』(二六)、『娼妓解放哀話』(三〇)がある。児童文学作品は、一九年に「金の船」(一九)、「金の星」が創刊されると、主宰者斎藤佐次郎に乞われるまま次々と創作童話を寄せようになり、千葉省三編集の「童話」その他に発表したものと加えると、かなりの量にのぼる。『馬鹿七』(一九)、「山六爺さん」(二〇)、「頬白の歌」(二〇)、「蚊帳の釣手」(三)など、筋の面白さに支えられ、読ませるものも。創作童話集に『父恋し』(二二)、「労働の少年」(二二)などがある。ほかに『聖書』や日本古典からの再話も多い。

五六一年一月三一日歿。

「山六爺さん」(やまろくさん) 長編童話。初出一九二〇年三一二月、「金の船」。山六爺さんと呼ばれ、狼や鹿などの獣と生活している老人が、盜人を捕らえて改心させ、一緒に共同社会を建設する。そこに三人の男が現れ、一日を勤労と研究と娛樂と睡眠とに四等分した暮らし方や、土地の公平な分配を教えて去る。筋の展開には作者の抱く理想社会像が託されているといつてよい。文章の冗漫さがやや気になるが、総じて手法は確かに、読ませるものを持つ。

【参考文献】関根文之助『宿命と戦った人』(一九五九 聖山堂)、

平林武雄「沖野岩三郎解説」(一九七八『日本児童文学大系11』)

オクセンベリ ヘン Helen E. Oxenbury 一九三八、イギリスの挿絵画家。劇場のデザイナーなどを経たあと、絵本作家、バーニングガムと結婚、その影響で、

では性の問題を正面から取りあげ、こうした問題意識は共訳の『ペーターの赤ちゃん』(八〇)、エッセイ集『子どもが大人になると』(八一)などにも發揮されてい る。

(藤田のぼる)

下に絵本や挿絵をはじめ。リアの『The Quangle's Hat クワングル・ワングルの帽子』とM・マ

アリの『普通の家にすむ竜』の挿絵で一九七〇年度のケイト・グリーナウエー賞を受賞。絵本に『Helen Oxenbury's ABC of things オクセンバリーのABC』(一九七一)、『Animals ぶらうしたぬ』(八一)、『Grandpa おじいちゃん』(八四)など。

(谷本誠剛)

奥田繼夫 つおぐくおだ 一九三四（昭9）児童文学

奥田綱夫（つねお）一九三四年（昭9）一児童文学作家。大阪府生まれ。集団疎開を経て、新制中学第二期生。この体験の意味を突き詰めることが、児童文学のへ向かうモチーフでもあった。同志社大学文学部卒。飲食店自営のかたわら、執筆活動に従事。デビュー作の『ボクちゃんの戦場』（一九六九）は、学童疎開の苛酷な集団生活の中で、優等生という自らのありようを鏡く問われる主人公の鬪いが描かれる。また『中学時代』（七三）、「夏時間（サマータイム）』（七六）などでは、自身の戦後体験を基底にしつつ、少年たちにとつての時代の意味を問う。これらは児童文学としては異色の大長編である点も特徴である。さらに、『少年の時』（八二）

の世界に入り、雑誌「教材王国」「指導計画」の編集で業績をあげた。

北海道小樽市に生まれる。高等小学校卒業後、職を転々と変え、上京（一九二八）、業界新聞の記者となる。プロレタリア文学運動が衰退しはじめたころに創刊された「詩精神」（三四）に拠つて、新しいタイプのプロレタリア系の詩人として登場する。「しゃべり捲れ」という活発な精神でことば数の多い作品を発表。詩集に『小能秀雄詩集』（三五）、「飛ぶ櫻」（三五）、ほかがある。童話集に『ある手品師の詩』（七六）がある。また、中村書店の編集部に務め、旭太郎の名でSF漫画『火星探險』などの原作を書いている。

小黒恵子

けいこ

一九二八（昭3）童謡詩人。

神奈川県川崎市に生まれる。中央大学法学部卒業。サ

トウハチロー主宰「木曜手帖」「まつばつくり」などの同人誌で詩・童謡を発表。一九七〇年、童謡集『シツレイシマス』を出版。そのほか、童謡集『ホラ耳をすまして』（一九七四）、少年少女合唱組曲『ライオンの子守唄』（八〇）、『飛べしま馬』（八一）などがある。日本詩人連盟、詩と音楽の会会員。日本童謡協会理事。

(こわせたまみ)

生越嘉治

よしほる

一九二八（昭3）児童劇

作家。徳島県生まれ。早稲田大学文学部卒業。成城学園初等学校教諭を経て小学館に勤務。教師のころより、学校劇脚本を中心とした創作活動をはじめる。児童劇賞（一九五五）、学校劇『おおかみがきた！』により、日本演劇教育連盟・演劇教育賞（六八）受賞。主な著書に『たのしい劇あそび』（八〇）、『劇あそびの研究』（八三）、『名作童話劇』（八四）。斎田喬、内山嘉吉の後を受け、日本児童劇作家の会会長となる。（小池タミ子）

尾崎紅葉

おこうよう

一八六七—一九〇三（慶応3—明36）

小説家。江戸芝の生まれ。本名徳太郎。父は牙彫の名手。少年時代に人情本や式亭三馬、山東京伝の作を愛読する。大学予備門（一高）に入学して一八八五年山田美妙、石橋思案らと硯友社を結成、「我楽多文庫」を出

す。八九年『一人比丘尼色懺悔』を発表して注目され、読売新聞に入社して専属作家となり、同紙に次々と連載小説を掲載して自らの文名とともに同紙の声価を高め、幸田露伴と並ぶ当時の代表作家となつた。俳句にも力を入れ、外国文学をよく読み、泉鏡花、徳田秋声らの後進を育てた。名作『金色夜叉』は未完で終わる。近世戯作を近代小説に改良して普及させた功績や、虚構の面白さに徹したロマンに満ちた構想力は、今も評価が高い。児童文学では、八九年『少年園』に『日本の春』と題する詩を徳太郎の名で発表したのをはじめ、四冊の著がある。しかし、『少年文学叢書』第二編『二
人むく助』（一八九一）はアンデルセン『大クラウスと小
クラウス』の翻案であり、同第一九編『俠黒兎』（九三）
はエッジワースの作からとり、『浮木丸』（九六）はグリム『三本の金髪をもつた鬼』の翻案、『幼年文学叢書』
第一編『鬼桃太郎』（九一）は桃太郎という名の鬼を主人公としたパロディーで、作品としては見るべきものはない。しかし、硯友社の統帥として巖谷小波のよき後ろ楯となり、多くの同人を博文館に協力させた功績は評価される。

【参考文献】福田清人『尾崎紅葉』（一九四一、弘文堂）、岡保生『尾崎紅葉の生涯と文学』（一九六八、明治書院）（勝尾金弥）

尾崎士郎

おさとう

一八九八—一九六四（明31—昭39）小説家。愛知県生まれ。一九一九年、早稲田大学政治経

済科中退。三三年、「都新聞」に『人生劇場』の『青春篇』を連載、三五年竹村書房より刊行され、川端康成らに激賞され、ベストセラーとなり流行作家となつた。児童文学作品には、大衆児童文学隆盛の前駆的作品とみられる『黒林の剣俠』（一九三三・三）「少年俱楽部』や、『父の星』（五四）、『少年行進曲』（五四）、『われは山の子』（五八）などの著書がある。

尾崎秀樹

（おさき ひでき）

一九二八（昭三）評論家、文

学史家。台湾台北市生まれ。異母兄に尾崎秀実。台北帝國大学附属医学専門学校中退。この来歴から『生きているユダ』（一九五九）以降のゾルゲ事件の解明、『旧植民地文学の研究』（七二）などが生まれている。一方、一九五九・六〇年ごろから歴史、大衆文学の評論研究に取り組み、『大衆文学論』（六五）、『歴史文学論』（七六）をはじめ著書多く、この分野の第一人者の定評を得る。児童文学、児童文化方面の主著は、年少時に愛読した『少年俱楽部』の作家たちのまとめである『伝記吉川英治』（六九）、『夢いまだ成らず—評伝山中峯太郎』（八三）などのほか、『現代漫画の原点』（七二）、『夢をつむぐ—大衆児童文化のパイオニア』（八六）、『さし絵の50年』（八七）。表層的な論断はとらず、足を使つて歴史と人間に迫る人生味深い記述態度に特長がある。

小山内 薫

（おさない
かおる）

一八八一—一九二八（明14—昭3）

（宮崎芳彦）

演出家、演劇評論家、劇作家、小説家。もと津輕藩の医者で、広島衛戌病院長の陸軍軍医正小山内建の長男として広島で生まれた。一八八五年、父の歿後、家族とともに母の生地である東京に移り、東京府尋常中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学英文科を卒業。学生時代から文学や演劇の世界で活躍、一九〇九年（明42）一月に歌舞伎俳優の市川左團次（一世）と提携して『自由劇場』を組織、イプセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』や『人形の家』など西欧の近代劇上演。これは坪内逍遙を中心とする『文芸協会』（一九〇六発足）の活動とともに、我が国の新劇運動の先駆といわれる。また、関東大震災後、ドイツから帰国した土方与志とともに二四年（大13）六月に創設した『築地小劇場』での仕事は、その後の我が国の新劇運動の基礎を築いたものとして大きな影響力をもつた。小山内は我が国の近代的な芸術運動の先駆者の一人と呼ぶにふさわしい多彩な活躍をしたが、児童文学や児童演劇の面でも大きな役割を果たした。雑誌『赤い鳥』には早くから童話や童話劇を書き、赤い鳥社発行の『赤い鳥の本』の一冊として、童話集『石の猿』（二）がある。また、築地小劇場の子供の日（二四）で上演された『そらまめの煮えるまで』など六編を収める童話劇集『三つの願ひ』（二五）は大正期の童話劇を代表し象徴する一冊。『学校劇の精神』（二六『演劇と文学』）や、『小

学校の「教育劇」について』(二八『演劇論叢』上)など、子どもの演劇教育についての発言もあり、今も貴重な意義をもつ。『小山内薰全集』(一九三三)、『小山内薰演劇論全集』(六四六八)がある。

小山内龍(りゅう)
一九〇四六(明三七昭二)

(富田博之)

家、漫画家。本名澤田鐵三郎。函館市に生まれる。高等学校卒後、蟹工船ボイラー・マンや自由労働者として生活しながら漫画童画を独習。一九三二年「週刊朝日」の懸賞漫画に当選し横山隆一らの集団に参加。三年後童画家として活動期に入り日本出版文化協会の第二回児童文化賞受賞(『動物と昆虫漫画』)、昆虫の挿絵や漫画に独自のデフォルメ性を發揮し、百田宗治作『オヤマノカキノキ』(一九四二)、『山カラキタクマサン』(四三)の絵を担当、好評を得、童画家としての地位を確立した。絵本『ゲンキナコグマ』(四二)や隨筆集『昆虫放談』(四二)が代表作。四二歳で歿した。(滑川道夫)

大仏次郎(おさらぎ)
一八九七一九七三(明三十昭四八)

小説家。本名野尻清彦。長兄は英文学者で天文学に詳しい野尻抱影。横浜市に生まれ、府立一中、一高仏学科を経て東京帝国大学政治科卒業。帝大在学中は専門の勉強はせず、新劇運動に加わる。その間、原田西子(雲名吾妻光子)を知り学生結婚。卒業後ロマン・ロランの翻訳をするとともに私立鎌倉女学校で約一年、国語と歴史の教鞭を執る。一九二二年、外務省条約局に勤

務。博文館の鈴木徳太郎の知遇を得、同社発行の「新趣味」に外国種の伝奇文学を抄訳して洋書代を稼ぐ。関東大震災後、「新趣味」が廃刊となり、鈴木は娛樂雑誌「ポケット」に移る。外務省を辞めたため背に腹は変えられず、齧ものに挑戦。「隼の源次」(一九二四)を鈴木にみせ、認められた。はじめて大仏次郎のペンネームを用いた。続いて『鬼面の老女』と題して中編を書いた。主人公の武士に謡曲の『鞍馬天狗』からヒントを得てその名を借りた。さい先よく好評を博し、早速、連載の催促を受けた。一五年には、「ポケット」連載の諸作がまとめられ、『幕末秘史・鞍馬天狗』『江戸巷談・艶説蟻地獄』『幕末秘譚・天狗騒動記』『鞍馬天狗・御用盜異聞』を次々刊行、スターにして自由人たる鞍馬天狗は大人にも子どもにも圧倒的人気を呼び、一躍国民的英雄となつた。この人気に支えられ、三〇年以上(一四五九)も書き続けた。人気上昇中の『少年俱楽部』から執筆依頼を受け、第一弾は『少年のための鞍馬天狗』『角兵衛獅子』(二七三三二八五)であった。以来、『海の男』(二七)、『山獄党奇談』(二八)、『日本人才イン』(三〇)、『青銅鬼』(三一)、『山を守る兄弟』(三二)、『海の荒鷺』(三三)、『狼隊の少年』(三四)、『狼少年』(三六)、『花丸小鳥丸』(三九)、『楠木正成』(四二)と意欲的に少年小説を発表、連載年数、作品数、和魂洋才の教養がじむる作品の品格で追随を

許さなかつた。ほかにもロマンティックな冒險小説『ゆうれい船』(五六・六・二一～五七・五・一七「朝日新聞」)やメルヘン『赤帽のすずき』『スイツチョねこ』(七二)がある。

「日本人オイン」^{【にほんじん】} 長編小説。初稿一九三〇年一月～一二月「少年俱楽部」連載。大陸制覇の動きがあわただしくなった時期に武断主義を戒めるかのように物語を描いている。鞍馬天狗に匹敵する浪人山田長政とその子オインが主人公として活躍。異国の地シャムの町にしつかり根を下ろした日本人町を築こうとする長政、オイン父子。ここに天下をねらう陰険なカラホムが暗躍、オインは軍勢の大将として立ちあがる。

【参考文献】村上光彦『大佛次郎—その精神の冒險』(一九七七「朝日新聞社」)、高橋康雄『夢の王国—懐しの少年俱楽部時代』(一九八一「講談社」)、高橋康雄『少年小説の世界』(一九八六「角川書店」)

(高橋康雄)

小沢 正^{【おざわただし】} 一九三七～(昭12～)児童文学作家。東京都杉並区に生まれる。早稲田大学入学とともに早大童話会に入会。

* 山元護久らと幼年童話研究同人誌「ぶう」を創刊(一九五八)。同誌に『トラゴロウのみぎのきば』『はこのなには』を発表(六〇)。大学卒業後、保育絵本の編集に一年間携わる。この間、「ほしからきたうま」(六二)を刊行。一九六五年、食いしんぼうの虎の子を主人公にした連作童話集『目をさせまく』

ラゴロウ』を発表。それまでの幼年童話にみられなかつた自立的でバイタリティーあふれるエネルギーッシュなキヤラクターと、幼児の感性や思考を巧みに捉えながら、そこに自己喪失の危機やアイデンティティーの追求といった高度なテーマを盛り込み、児童文学の新たな可能性を切り拓いた。この作品でNHK児童文学奨励賞を受賞。以後擬人化した動物を主人公にした、ユーモラスで寓意性豊かな作品をもつぱら幼年童話のスタイルで発表し続ける。『こぶたのかくれんば』(六九)、『はらぺこのオニごっこ』(七〇)、『めんどりのコツコ

おばさん』(七〇)、『のんびりこぶたとせかせかうきぎ』(七四)と、深い人間洞察に基づくユーモアに円熟味が増し、『やくそくはやくそく』(八二)、『コンチキ広告会社』(八二)、『せかいいちきたないレストラン』(八三)『かがみのルビック』(八四)と、人間存在の不思議な情動を追求し、子どもだけではなく、大人にも多くの読者をもつ。評論的な著作に、『童話の方法』(八五)がある。

小澤俊夫^{【おざわとしお】}

一九三〇～(昭5～)

(野上 晓)

学者、独文学者。中国長春に生まれる。東北大学独文学科卒業。筑波大学教授。国際口承文芸学会副会長、日本口承文芸学会会長。リュートイの昔話論をはじめ日本に紹介し、大部な『世界の民話』を編訳するなど、ヨーロッパにおける口承文芸研究の成果を日本に

オサワヨシク

伝えたばかりでなく、日本の昔話の研究にも力を尽くし、日本の昔話をドイツ語に訳している(フィッシャー文庫)。著書『昔話とは何か』(一九八三)。訳書リュティ(リュー・ティ)『ヨーロッパの昔話』(六九)および『昔話とその美学と人間像』(八五)。編書『日本昔話通観』全二八巻(七七)などがある。

(野村 法)

小沢愛園 一八八七~一九七八(明20~昭53)

演劇研究家。静岡県沼津市に生まれる。慶應大学文学部を卒業後、同大の管理部門で働き、慶應塾監局長、参考事務を務めるほか、文学部教授、「三田評論」編集長などを歴任した。学生時代から民俗学、とくに人形劇に関心をもち、数少ない人形劇研究家として先駆的な仕事をした。戦中には大政翼賛会の人形劇委員会委員となる。『忠臣蔵淨瑠璃集』(一九二九『帝国文庫』収録)、『世界各個人形劇』(四三)、『大東亜共栄圏の人形劇』(四四)などの著書がある。

(富田博之)

押川春浪 一八七六~一九一四(明9~大3)

小説家。愛媛県松山市に生まれる。本名方存(まきあり)。父はキリスト教界草分けの名士方義。父の布教と事業に伴つて幼少時から新潟、仙台などの各地を転々とした。明治学院、東北学院の中等部、札幌農学校、水産講習所を経て東京専門学校(現早稲田大学)を卒業。その間、父親のキリスト教や洋風への反発から野球に熱中し、乱暴狼藉の限りを尽くし、その蛮勇は学生界にあまねく

知れわたった。東京専門学校在学中、桜井鷗村の紹介で、柳川龍太郎という旅行好きの主人公が世界漫遊に出る冒險小説『海底軍艦』を「少年世界」を主宰していた巣谷小波のところに持参したところ、東京堂を紹介され刊行。その後、小波の博文館の「少年世界」「中学生世界」に諸作品を発表し、冒險小説の名称を確立した。『武俠の日本』(一九〇四)ではじめて段原劍(だんぱらけんとう)東次を登場させ、英雄的人物の時代的要請に合致して世間の話題をさらい、さらに『新造軍艦』(〇六)、『東洋武俠団』(〇八)など奔放な空想を駆使した冒險小説で洛陽の紙価を高めた。一九〇四年、小波の推挙によって博物館に入社。「日露戦争写真画報」(後に「冒險世界」と改題)を編集、「冒險世界」の主筆として青少年の血を沸かす冒險的誌面で青少年を鼓舞した。運動競技会、天狗俱楽部などを主催し、野球を心身を鍛錬する武道となすべく主張するなど体育界の黎明期に尽力した。一年、野球撲滅論を唱える東京朝日新聞と論争、小波、春浪ともに博文館を辞職。一二年、新たに雑誌『武俠世界』を創刊し、挿絵の小杉未醒とのコンビで冒險小説を次々発表したが、酒癖が悪くなり、一三年、身体の具合がすぐれず、小笠原島へ保養を余儀なくされた。一四年一月、風邪から急性肺炎にかかり、三八歳の生涯を閉じた。

〔新日本島〕

しんほんじま

冒險小説。一九〇四年刊。南洋

の無人島に流れついた歓傍艦。そこに海賊が隠した無限の金銀財宝を発見、これを用いて軍艦および戦力を増強し、歓傍艦をロシアに派遣しようとする。このうわさを聞きつけた日本の英雄豪傑が歓傍のもとに集結する。その中に荒武者・蛮勇俠客段原剣東次がいた。俠客のそばには常にたてがみをなびかせる獅子荒風がひとりと身を寄せている。慷慨激熱の士・段原は、『東洋武侠団』(一九〇七)では民族自立のため戦う健脚の持ち主として活躍する。この段原剣東次は、大仏次郎の『鞍馬天狗』のモデルに影響を与えるほどの人気者であった。

【参考文献】横田順彌『日本SFこてん古典』(一九八〇)早川書房、高橋康雄『夢の王国—懐しの少年俱楽部時代』(一九八一)講談社、高橋康雄『少年小説の世界』(一九八六)角川書店、近代文学研究叢書15押川春浪』(一九六〇)昭和女子大(高橋康雄)

オジヨゴフスカ ハンナ Hanna Ożogowska 一九〇四、ポーランドの女流児童文学作家。教師出身。児童雑誌の編集者としても活躍した。幼児向きの童話・詩なども多いが、オジヨゴフスカの才能が存分に發揮されたのは『*Zofia kula* 金いろのまり』(一九五七)など学校生活や少年少女の集團を生き生きと描いた中編長編小説であり、抜群の構成力とあふれるユーモアが読者を惹きつける。『*Ucho od Sledzia* ニシンにはえた耳』(六四)は国際アンデルセン賞オナーリストにあげ

られた。

(内田莉莎子)

オストロフスキー アレクサンドル・Н. Александров

ニコラエフ・オストロ夫斯基 一八二三一八六 ロシアの劇作家。『ロシア国民演劇の父』といわれ、『Гроза 雷雨』(一八五九)、『Горячее сердце 热き心』(六九)、『Лес 森林』(七一)、詩情豊かな伝説劇『Снегурочка 雪姫』(七三)など多数の名作戯曲を残している。帝室マール

イ劇場の文芸部長、その俳優学校長を兼ね、同劇場は「オストロフスキーの家」と呼ばれている。(中本信幸)

オセーエワ ワレンチナ・А. Валентина Александровна Осеева 一九〇二一六九 ソビエトの児童文学作家。革命・内戦後、孤児收容施設で丸一六年間子どもたちの世話をするかたわら、マルシャークと協力、子どもたちのための詩や物語を書いて読み聞かせ、自作の芝居を上演した。一九三七年に短編の一つか新聞に掲載され、本格的な作家活動に入る。第二次世界大戦中の

ピオネール少年団の活動を描いた『ワシヨークと仲間たち』(一九四七一五二)、自伝的色彩の濃い『Динкаジンカ』(五九)は今でも人気がある。

(中込光子)

尾関岩二 おせきいわじ 一八九六一九八〇(明29昭55)

童話作家、評論家。本名岩治。岡山市の生まれ。同志社大学英文科卒業。ジャーナリストとして大阪毎日新聞社、大阪時事日報社に勤務。児童文学の創作は大正中期からで、作家的登場は『お話のなる樹』(一九三三

「東京日日新聞」であり、最初の童話集はこの作を含んで『お話をなる樹』（二七）であつた。続けて『フェアリーオ姫様と鍵』（三五）、『月夜の笛』（四〇）、『希望の島』（四二）などがあり、少女小説に『大陸の旗』（四〇）などがある。そのほか翻案や戯曲もあつて多彩。また児童文学の研究批評の領域では、松村武雄、藤沢衛彦、蘆谷蘆村などの知名度はないものの、昭和初期から戦時にかけての理論には見るべき著述が多い。一九二六年に結成された童話作家協会の創立時からのメンバーであると同時に、主要な理論家の一人でもあつた。『童心芸術概論』（三二）は尾関の理論の体系化であった。成人者に残る児童性を根拠に、音楽、絵画、舞踊、映画などにも目配りしつつ童話童謡に内在する問題と読者との相関、そして当時の芸術教育に対する批評を行つてゐる。いわゆる「童心」についての追求の書であるといつてよい。さらに第二次大戦後には『児童文学の理論と実際』（四九）を著している。

（岡田純也）

尾竹国觀

おだかん

（岡田純也）
おだかん
一九〇〇～七九（明33～昭54） 小説家。本名武夫、新潟県高田市に生まれる。高田中学から東京外語支那語科卒。外務省書記として中国杭州に赴任。詩人の蔵原伸二郎と親交を結び、退官して作家生活に入る。「文学生活」創刊号に、中国の知識階級の苦悶する姿を描く『城外』を発表、一九三六年、芥川賞を得る。その後も中国を訪れ、『魯迅伝』『紫禁城の人』（共に四二）などの作を生む。陸軍報道班員としてビルマに従軍もしている。戦後もリアルな目でとらえた長短編を次々と出すほか、松川事件取材の二部にわたる長大作『眞実の行方』（五七）などで注目される。小川未明と同郷の生まれ、中学も同窓ということで、児童文学への関心も深く、越後民話の再話『雪女』（四三）、人間未明にせまつた伝記小説『童話のおじさん』（六四）のほか『小説坪田譲治』（七〇）も出し、児童文学史の貴重な資となつてゐる。

（西沢正太郎）

織田秀雄
ひでお
一九〇八～四二（明41～昭17）児童

文学作家、詩人。筆名顔。岩手県に生まれ一九二六年岩手県立水沢農学校卒業。小学校代用教員となり綴方運動を行う。二七年には『農民芸術連盟』の影響を受けた雑誌「天邪鬼」を刊行、自らも創作とともに『鬼

六と大工』などの昔話を収集発表。三〇年に上京し秋田雨雀などとともに「新興教育研究所」の創立メンバーとなり、プロレタリア児童文化運動に参加。プロレタリア童謡集『小さい同志』(一九三二)中に作品がある。歿後に『織田秀雄作品集』(八〇)が刊行される。

落合聰三郎 (おはい)
童劇作家、教育者。東京市本所生まれ。青山師範卒業。

公立小学校に勤務し、学校劇研究会、日本学校劇連盟(現日本演劇教育連盟)の創立者の一人として演劇教育の普及発展に努める。学校演劇の脚本を多数書いているが、昭和初期から貫して子どもの生活を確かにみつめるアリズム的作風を確立した人といってよい。

『学級図書館』『おしくらごんべ』『じてんしゃ』『怒りの日』などが代表作。一九五四年に『たんじょう会のおりもの』その他の作品により、小学館文学賞受賞。現在も学校劇の創作、学校劇集の編集など活発な活動を続けている。港区水川小学校教頭を最後に公立小学校勤務をやめ、教師養成教育に携わり、家政大学教授その他を歴任した。六七年少年演劇センターを創設。季刊誌『少年演劇』の刊行とともに、欧米の児童劇や演劇教育の紹介など国際交流の窓口となり、二年ごとに開かれる国際児童青少年演劇会議や各地の児童演劇祭にもよく出席。「少年演劇」別冊として『世界の児童

(大岡秀明)

劇』、『日本の児童劇』などを編集出版。日本の児童劇団の海外公演、外国の児童劇団の日本公演の斡旋など、児童劇の国際交流のために貢献している。現在国際児童青少年演劇協会日本センター副会長、厚生省中央児童福祉審議会文化財部会委員、東京都優秀児童劇選定委員などを務める。また、地域の母親と子どもの劇活動や高齢者の劇活動など、新しい演劇運動の開発にも意欲をみせている。

落合直文 (おちぶみ)
歌人、国文学者。号は萩廬。宮城県本吉郡松岩村に

生まれた。父は鮎貝盛房で仙台藩家老の門閥であった。直文は次男、幼名は亀治郎。一八七四年、志波彦神社宮司兼大講義落合直亮にその才を見込まれ、養子となる。七七年伊勢神宮彌宜となつた養父に伴われ伊勢にいき神宮教院に入学。同院でもつぱら神典、国史、国文、和歌を学ぶ。その後東京大学古典科講習科を受験入学。八八年、皇典講究所(現国学院大学)および補充中学校の教師となり、さらに第一高等学校、東京専門学校にも出講した。国文学関係の多くの編著書のほか、遺文集『萩の家遺稿』(一九〇四)、『萩の家歌集』(〇六)がある。児童文学関係では、教科書として『中等国語読本』全一〇冊、課外読み物として『家庭教育歴史読本』全四冊などを書いているが、有名なのは物語唱歌で、英語、ドイツ語にも訳された『孝女白菊の歌』(一

八八八)と『楠公の歌(桜井訣別)』(九九)は作曲されて人口に膾炙した。

(桑原三郎)

乙骨淑子 よしこ。一九二九八〇(昭45)児童文学作家。東京生まれ。私立桜蔭高女卒。一六歳で敗戦、宮城前で土下座をする『軍国少女』だつたが、一七歳でマルクス主義に出会い、二七歳で「こだま児童文学会」に入会。以後、一作一作、社会の第一義的なテーマに取り組む。処女作の『びいちやあしやん』(一九六四)では中国における日本軍の戦争責任を、「八月の太陽を」(六六)では史上初のハイチ黒人独立運動を、「合言葉は手ぶくろの片っぽ」(七八)では反安保闘争その後を、『ピラミッド帽子よ、さようなら』(八一)では荒廃した教育問題をそれぞれ追求した。そのほか、『こちらポポロ島応答せよ』(七〇)、『青いひかりの国』(七一)、『十二歳の夏』(七四)などの小説や書評・評論もある。日本の児童文学には珍しく骨太で、スケールが大きく、個人を常に社会の中において捉え、権力の構造や革命の方法を追求した。長い闘病生活中も明るさを失わず、激しく生き、多くの人に惜しまれながら、五一歳で他界。

(吉田新一)
名ユリシーズ)が一〇年間漂流と冒險で故郷に戻れず、しかし、最後は妻に二〇年ぶりに再会、留守中の悪質な求婚者たちに息子と復讐する。児童向けの再話に、チャールズ・ラムの『ユリシーズの冒險』とバーバラ・ピカードの『オデュッセイア物語』の邦訳がある。

(吉田新一)

オデール スコット Scott O'Dell 一九〇三一 口

サンゼルス生まれのアメリカの作家。国内およびローマの大学で教育を受け、種々の職業を経て作家になる。歴史研究を深め、当時の子どもの本に失望して『青いイルカの島』(一九六〇)を発表、ニューベリー賞受賞。『黄金の七つの都市』(六六)、『黒い真珠』(六七)、『ナバホの歌』(七〇)など、滅びゆく少数民族に視点を合わせた作品が多い。しかし、彼のサバイバル意識はやや曖昧。

(島式子)

お伽絵解ことども → ことども

お伽俱楽部

*
くらぶ

久留島武彦が、一九〇六年(明39)

の構造や革命の方法を追求した。長い闘病生活中も明るさを失わず、激しく生き、多くの人に惜しまれながら、五一歳で他界。

(奥田繼夫)

オデュッセイア Odysseia 英語名 Odyssey
『イーリアス』とともにホメロスによる紀元前八世紀ごろのギリシア最古の叙事詩。トロヤ陥落後、ギリシア軍に加わったイタケー島の王オデュッセウス(英語

横浜の教会を会場にはじめての「お伽講話会」を開いたが、その経験をもとに発足させた機関で、神田の基督教青年会館を会場に毎月「お伽講話会」を開き、口演童話だけでなく、子どものための多彩な演目を盛り

込んだプログラムを組んで、一種の子どものための常設劇場的な役割を果たした。機関紙「お伽世界」(一九〇九・四 創刊)や月刊誌「お伽俱楽部」(一・六 創刊)を刊行、東京市内には支部をおき、全国の多くの都市には、「京都お伽俱楽部」「大阪お伽俱楽部」「富山お伽俱楽部」などの組織が生まれた。「お伽俱楽部」の活動は明治期末まで、ほぼ七年間にわたって続けられ、口演童話を中心とする子ども文化運動の発展に重要な役割を果たした。

お伽芝居

(富田博之)

我が国における児童演劇の草創期の呼称。大正期からは童話劇、児童劇と呼ばれるようになる。一九〇二年(明35)に、二年間のベルリン大学附属東洋語学校講師としての海外生活を終えて帰国した巖谷小波は、翌〇三年一月発行の雑誌「歌舞伎」に「独逸の御伽芝居」というドイツで見聞した子どものための芝居について紹介。同年二月発行の「少年世界」増刊として『お伽春若丸』を刊行。これが「お伽芝居」という用語のはじまりである。同年一〇月三、四日に、東京の本郷座において、ヨーロッパ巡演の折、ベルリン滞在中の小波とも面識のあつた新派劇の創始者の一人である川上音一郎の一座が、小波と久留島武彦の協力のもとに、「お伽芝居」を公演。これが我が国の児童演劇公演のはじまりとされる。これを機に「お伽芝居」という用語が広く知られるようになった。小波はその

後、〇五年に「少年世界」増刊号に『笑ひ山』『五光の瀧』など四編の「お伽歌劇」を発表。大正期に入つて、初期宝塚少女歌劇で「お伽歌劇」が上演されるが、その呼称も小波の創始によるものとみてよいだろう。

(富田博之)

お伽衆

(吉沢和夫)

貴人の側近に仕えて相手を務める役目。室町時代の末から江戸時代のはじめにかけて存在した。「伽」とはもともと人の相手をすることを指す用語で、貴人の話し相手を主眼とする御咄衆と全く同一の役目とはいえないが、多くの場合混同して用いられた。彼らは博学で話術に優れ、世間の情報によく通じていた。また中には特殊な芸能を身につけている者もいた。江戸後期になると民間に下つて講談師や落語家になる者もあつた。

お伽唱歌

(吉沢和夫)

明治期における子どもの歌の一様式。伊沢修二の努力によって文部省から『小学唱歌集』初編が刊行されたのは一八八二年四月であるが、以後洋楽は着実に普及して、日本の子どもの友となつた。巖谷小波が唱歌に注目して、『日本昔々』の巻頭に諸家の創作唱歌を載せたのは九四年である。その後「少年世界」の編集を担当してからは、毎号に唱歌童謡を載せ、小波自身も創作しはじめた。一九〇一年からは東儀鉄笛を作曲を依頼して、多年にわたる創作唱歌を鉄笛の曲譜とともに『お伽唱歌』(一九〇八)として刊行し

た。

お伽草紙

(おとぎ)

御伽草子とも書く。中世小説中の物語の類。後世巖谷小波によつてお伽噺という子どもに

読ませる読み物が流行したが、名前は似ていても必ずしも子ども向きにつくられたものではない。狭義といえば、近世の享保(一七一六・三五)のころ、中世の物語から二三編を選んで印行された『祝言御伽文庫』一名『御伽草子』を指す。女性の教養のための叢書で、文正草子・鉢かつぎ・小町草紙・御曹子島渡り・唐糸草紙・木幡狐などである。広義には、室町時代から江戸初期までの物語草子の総称として用いられている。内容も、(1)公家物、(2)宗教物(僧侶物・本地物)、(3)武家物、(4)庶民物、(5)外国物、(6)異類物など広範だが、そちらは市古貞次の中世小説と呼び区別すべしという説(『中世小説の研究』)がしたいに重んじられており、本版印行以後のものに限定するのがよからう。名前の類似から大名のお伽衆の話とみる向きも以前にはあつたが、これは性質が違う、別のものである。

(益田勝美)

おとぎの世界

(おとぎの世界)

大正期、雑誌「赤い鳥」の創刊(せかい)、「一九一八・七」に象徴される児童文化運動の興隆の中で生まれた児童文芸誌の一つ。当時、「秀才文壇」を発行していた文光堂の社主、野口安治が「赤い鳥」の出現に刺激されて一九一九年(大正八)四月、創刊した。以後、二三年一〇月終刊まで、臨時増刊号一冊を含む計

(桑原三郎)

四四冊を発行した。編集実務を担当したのが、後年の新内師匠、岡本文弥(当時、井上猛二)である。創刊号から同年九月号まで、小川未明監修となつており、未明自身も『牛女』(一九一五)をはじめ『めくら星』『金の輪』など童話七編、『月が出る』(創刊号)などの童謡七編を発表し、また投稿童話、童謡の選も受けもつてい

る。「赤い鳥」の主宰者、鈴木三重吉が「猿まね雑誌」だといつて抗議したことともとに知られている。未明のあと、山村暮鳥が童謡の選者を担当し、自らも代表作の長編童話『鉄の靴』(一九一九・二・二三・三)を同誌上に連載した。この作品は暮鳥の代表作というにとどまらず、日本におけるキリスト教児童文学史上の記念碑的作品ということができるものである。ほかに豊島与志雄、野口雨情、相馬御風、白鳥省吾、与謝野晶子、上司小剣、長与善郎らが競つて作品を発表。さらに前記、井上猛一が武者小路実篤に傾倒していたことから、実篤をはじめ中村亮平、塚原健二郎など、『新しき村』運動の作家たちが多く登場していることも注目されよう。後年の『三太物語』の作者、青木茂が一九歳で暮鳥の推薦によつて処女作『詩人の夢』(一九二〇・六)を発表してもらっている。投稿家からは都築益世、大関五郎らが巣立つていて、翻訳でも、「ロシア童話号」(一二・一)、「ポオランド童話号」(同、四)、「東洋童話号」(一二・四)、「仏蘭西童話号」(同、七)などがあり、松本苦味、

昇曙夢、大泉黒石らが活躍した。また、創刊号から同年一〇月号まで（途中、二冊を除く）後年の日本童画界の重鎮、初山滋が表紙絵を描き、そのアール・ヌーボー風の華麗な世界も、この雑誌の存在をおおいに特徴づけたといえる。

【参考文献】『雑誌「おとぎの世界」復刻版別冊〈解説〉』（一九八四 岩崎書店）

（小西正保）

お伽噺おとぎ 伽とぎも噺はなしも和製漢字で「とぎ」には眠らないで参加するという意味が含まれ、話をする「かたる」の意味があった。同一の話を繰り返さないために新味をえた話を「噺」の字が意味している。戦国時代の大名の夜の話相手であった「御伽の衆」が、民間説話を整理し、潤色して、それまでの素朴な昔話に新味を加えたり、主人のご機嫌をとるために笑いの要素を加えるようになったといわれている。初めのころは、話者も聴者も成人で、子どもを聞き手として予想していかつた。一方、家人が子どもたちを聞き手とする民間説話は「祖父祖母之物語」、「昔がたり」、「童話（わらべのものがたり）」として存在した。この口承説話が江戸期に板本絵本にもなって読み物の形をとる。明治期に巖谷小波が「幼年雑誌」に「お伽ばなし」欄（一八九四）を設けて以降、昔噺を含む伝承説話の再話とともに創作お伽噺を主唱し、少年小説と区別して「お伽噺」の用語を定着させた。小波は「お伽

文学の用語も使用したが、説話的性格を離脱するのではなく、大正期の創作童話文学の出現に待たなければならなかつた。（滑川道夫）

乙竹岩造

（一八七五～一九五三（明治～昭和28））

教育学者。三重県上野市に生まれ、東京高師を卒業。欧米留学。母校の教授を経て東京文理科大学教授を務めた（一九一九～三九）。日本における教育学創始者の一人として広い分野に著書を遺したが、とくに『日本庶民教育史』全三巻（二九）にあつて、庶民生活・児童文化の展開と庶民教育の発達とのかかわりを綿密に跡づけた業績が注目される。また英才児や障害児の教育に関する教育も、先駆的なものとして見逃せない。

（石川松太郎）

鬼おに 我が国では、古くはさまざまの邪惡な魔物を「モノ」と呼んでいた。『常陸國風土記』や『万葉集』に使われている鬼の字は、そのモノを表すために借用されたに過ぎない。その古来のモノに新しく「オニ」が加わって、『源氏物語』などに登場してくる。それはみな姿形が見えない存在で、隠と呼ばれ、オニと発音されるようになつたものかと考えられる。中国の死者の幽鬼の觀念が入ってきたのであろう。この新しいモノであるオニが、人の姿に近く、朱面双角の恐ろしい形の存在と考えられるようになつたのは、中国から伝わつた歳末の追儺の儀式で、宮廷の四門から疫鬼を追

い出す方相子の姿が、追われる見えない疫鬼と取りまちがえられた結果という。『宇治拾遺物語』のこぶ取り爺の話などでは、赤い裸身、青い裸身などの鬼が一つ眼や三つ眼で登場していて、朱面双角の方相子の紛装のイメージからさらに変化している。その後も、人びとの想像を誘って、オニのイメージは多様化していった。

(益田勝実)

小納 弘 一九二八～（昭31）児童文学作家。兵庫県西宮市に生まれる。一九四〇年、旧制浪速高等学校文科中退後、石川県加賀市に移り、四八年より教員生活（小・中学校）に入る。五九年、北陸児童文学協会を結成、同人誌「つのぶえ」を拠点に創作、普及活動を続ける。地域の歴史民俗研究に基づく『五色の九谷』（一九七〇）、『はだしでうたつた手まり歌』（七

三）、子どもの日常生活に取材した『一ねんぼうずのマスオくん』（八〇）など、多數の作品がある。（西山利佳）
小野木 学 一九二四～七六（大13～昭51）絵本画家、絵本作家。本名学。東京都に生まれ、油絵や版画で活躍する。絵と文の絵本に、『さよならチフロ』（一九六九）、『かたあしだぢょうのエルフ』（七〇）、『もずのこども』（七六）。絵本の絵には、「たらばがにのはる」（七〇）、『しらさぎちょうじや』（七〇）など、絵ばなしの絵に、『絵をかくはと』（七二）などがある。野鳥に関する心があり、絵本も鳥に関する版画的手法の絵が多い。

(滑川道夫)

小野 直 一八九七～一九七七（明30～昭52）口演童話家。一九三二年東京文理大学国語国文学科卒。同期に丸山林平、熊沢竜がいる。早くから口演童話に志を立て、下位春吉の影響を受けながら、大塚講話会の中心人物となる。卒業後大阪朝日新聞社に入り、山北清次とともに「耳の新聞班」（戦後「朝日児童文化の会」）の中心となつて全国を巡講した。戦後、朝日新聞社客員、大阪市民生局少年課に勤めた。端正高貴な話術で知られる。また、一方的講話に対する、相互通行としての話し合いの導入を主張した。

(倉沢栄吉)

一九七〇年に小学館絵画賞受賞。

(井上共子)

小野俊一 一八九六～一九五八（明29～昭33）

科学者、翻訳家。筆名滝田陽之助。京都市に生まれる。東京帝国大学卒後、ペトログラード大学自然科学科卒。バイオリニストのアンナ・ブブノーワと結婚。東大助手から京大助教授を経て上京。発明協会の役員となる。

おの ちゅうこう 一九〇八（明41） 詩人、

児童文学作家。本名小野忠孝。群馬県利根郡白沢村に生まれ、六歳で母と死別し養子に出された。旧制沼田中学時代に詩作をはじめ、一九二五年ごろ地方新聞に詩が掲載される。二七年、群馬師範を卒業、群馬県下の川場小学校、采女小学校などで教師生活を送る。このころ、河井醉茗、生田春月、千家元麿らと交友。三四四年に千葉春雄の勧めで上京し、小学校教師のかたわら詩作に専念。上京後、白鳥省吾らと交わる。四〇年、文学に専念するため教職を辞し、詩を「愛誦」「女性時代」「昭和詩人」「知性」などに、童謡・少年少女詩を「幼年俱楽部」「少年俱楽部」などに発表。詩集に『牧歌的風景』（一九三三）、『明るい教室』（四三）、『野ばらの歌』（六九）。代表作に『氏神さま』（四二）のち四九『ふるさと物語』、六四『ふるさとの四季』と改題)、『子供はなぜなくか』（五〇）、『高原の合唱』（五九）、野間児童文芸奨励賞受賞の『風は思い出をささやいた』（六五）、『山のみやげ話』（七〇）、『定本おの・ちゅうこう詩集』（七二）がある。

（根本正義）

小野十三郎

（おのぶるろう）

一九〇三（明36）詩

人。本名藤三郎。大阪市浪速区新川町難波新地の資産家の家に生まれる。東洋大学文化学科中退。詩誌「赤と黒」（第二次）、「彈道」に参加し、処女詩集『半分開いた窓』（一九二六）以来、『短歌的抒情の否定』をテーマ

にアナーキスティックな詩風で知られる。戦後も詩誌「歴程」復刊にかかるなど詩作を続けるが、一方で「大阪文学学校」開校、児童詩雑誌「きりん」に参加するなど、後進の指導に当たっている。少年少女向きの詩集に『太陽のうた』（ハセ）などがある。（西寄康雄）

小野 浩

（おのひろし）

一八九四（明27）昭8 小説家、童話作家。鹿児島県加茂郡に生まれる。早稲田大学英文科卒。少年時代から細田民樹、大木惇夫らと自作の原稿をとした回観文学雑誌をつくり、この交友は生涯にわたった。中学時代、「文章世界」に投稿し注目された。「赤い鳥」社に入社、小島政一郎の後を受け

て童話童謡雑誌「赤い鳥」の編集を一〇年以上にわたって務めた。「赤い鳥」の主宰者鈴木三重吉の信頼は大きく、気難しい三重吉も「小野さんを叱つた」ということは、一度もなかつた（野町てい子）。童話は主に「赤い鳥」に発表され、「鰐」（一九二二・一二）から『馬車のくるまで』（三一・六）三六編を数える。「鰐」「熊と狐」など寓話風な動物童話が主で、外国種の再話も多い。『お寝台のはなし』（二八・五「赤い鳥」）にみられる「おはなし」文体は、訓意を盛り込んだお伽噺脈につながる。主著に童話集『森の初雪』（四〇）がある。『新青年』掲載の翻訳作品もある。

（大藤幹夫）

小野政方

（おのまさかた）

一八八五（明18）昭20 童話作家。明治末から児童文学創作を行い、お伽噺か

* 童話へと思潮の変化する時期に創作翻案を試みた。多くは幼年の読者を対象とする短編であり、母親と子どもとの心の通い合いをしていねいに描くところに特質があった。一九二〇年には研究社の『小学少女』の編集に当たっている。代表作集に『お伽噺集』(一九一七)、『じろいこうさぎ』(一九一四)、『あすやく花』(三三五)などがある。アンデルセン童話の翻案にも特徴があつた。

(岡田純也)

オーノワ夫人

オーノワ

Marie Jatherine Le Junel de Barnevile, comtesse d'Aulnoy

一六五〇—一七〇五

フランス古典時代の作家。ノルマンディの貴族の家に生まれ、一五歳でオーノワ伯と結婚。変転を極めた前半生の後、パリへ戻り、サン・ブノワの自宅でサロンを開き華やかに活躍。『イポリット』(一六九〇)、『スペイン紀行』(九一)、ついで『新妖精物語』(九八)を書く。『金髪姫』『緑の小蛇』『青い小鳥』『白い牝猫』など昔話に材を得た宮廷風の妖精物語は当時の流行となる。

(石沢小枝子)

お化け

おばけ

幻や影のように実体がなく、その本質を変えて不思議な形に化けるもので、本体には、(1)人間(2)動物(3)植物(4)器物(5)自然物が考えられる。(1)は幽霊であり、(2)以下は妖怪である(天狗・河童・天邪鬼などの本来の妖怪は入れない)。(1)幽霊はあの世から立ち戻った死者の靈魂で、帰還者ともいわれる。この観

念のもとには靈魂信仰および死への恐怖があり、靈魂は肉体とは別存在で遊離するという考え方がある。この世で果たせぬ願望、後悔、恨みなどから起る現世への執着から、成仏できず迷う靈魂が、生前の姿をとり特定の人の前に現れたたりする。イギリスでは、洗礼を受けずに死んだ赤ん坊は、天国に入れず迷つて一種の妖精(たとえばショートホガーズ『たあたちやん』)となつて水辺の間に出現するといわれるが、またドイツでは万聖節(一一月一日)にそうした赤ん坊たちは、母代わりのホレおばさんに率いられ、教会のミサに連なるといわれる。妖怪としての動物には、年を経た蛇・狐・狸・ムジナ・蜘蛛・猫などがあり、人間の娘や恐ろしい入道などに化ける。植物では、柳や楓の木が乳を出して赤ん坊に飲ませたり、榆の木が美女となつて男性を誘惑したり櫻がことばを話したりする。器物としては、傘が一つ目小僧に化けたり、チエスの駒が動き出したり、古いつづらが老婆に化ける。出現時刻は、日本では日暮れの逢魔ヶ時と丑三つ時であるが、西洋では真夜中零時から一時までが幽霊時で、一番鶏が鳴くと消える。場所は、日本では峠、四つ辻、水のほとりなど「境」が多いが、西洋の場合は墓場、殺害現場、刑場、廃墟、古屋敷などである。幽霊は目的とする人物の前に現れ、出没の場所が概して不定であるが、妖怪の場合、現れる場所が一定しているので遭うのを避

けることができる。出現を防ぐには、祈り（経文）、十字架、鏡、火、光、鉄（剣）などが効き目がある。ワイルドの『カンタベリーの幽霊』にみられるように、心の清い処女や罪のない子どもは幽霊を正しく天国に導けるといわれる。

オハナシ

(井村君江)

小原国芳(おばら くによし) 一八八七～一九七七(明20～昭52)

教育者。鹿児島県出身。京都大学哲学科卒業。広島高師附属小学校理事(教務主任)を経て、一九二〇年沢柳政太郎校長の私立成城小学校(のちに成城学園)の主事となり、大正新教育運動の先導的役割を果たした。とくに二三年『学校劇論』を著し、全人教育として芸術教育を位置づけ、学校劇の理論を明らかにした。それは斎田喬らの実践活動と相まって、成城学園を学校劇および新教育実験校としての名を高らしめた。教育書・児童書を主とするイデア書院、玉川学園出版部を経営。三二年我が国最初の『児童百科大辞典』全三〇巻刊行。二九年玉川学園を創設。知育偏重の風潮と全体主義的教育の中で、豊かな調和的人格形成をいう全人教育を提唱。編著書多数。『道徳教育論』(一九五七)を含む『小原国芳全集』(五〇～七八)に収録されている。人間的魅力あふれる人柄と、広い視野と経営の才、そしてたくましい行動力など独自な風格をもつ教育者であつた。

(岡田 陽)

お話の木(おはなし) 月刊童話雑誌。一九三七年(昭12)五月子供研究社より創刊、三八年(昭13)二月廃刊。主宰^{*}*創刊、三八年(昭13)二月廃刊。主宰^{*}*小川未明、編集に奈街三郎。未明の童話『花咲く前』(一九三七・五)、北原白秋の童謡『お話の木』(三七・五)が創刊号に掲載されて以来、毎号のように未明、白秋の作品が発表された。横本楠郎『栗ひろひ週間』(三七・二)、塚原健二郎『田舎の絵』(三七・八)、太田博也の『ドン氏の精』(三八・一)の童話、佐藤義美『木のぼり』(三七・八)、巽聖歌『旗』(三七・一〇)の童話が発表された。

(岡田純也)

オヒサマ 株式会社資生堂(一八七二創業)が発行した子どもと母親向けの月刊誌。一九二二年(大11)四月創刊、翌二三年八月号で終刊。慶應大学文科を卒業した劇作家水木京太が編集長を務めた。吉井勇、久保田万太郎、小島政一郎、北原白秋、西条八十、浜田廣介、楠山正雄、中島孤島など、鈴木三重吉の「赤い鳥」と

比べられる執筆者をそろえた内容だった。「『オヒサマ』の会」と名づける会員制を採り、童謡、自由画、写真などの読者投稿を求めて、高級化粧品の資生堂の顧客づくりを企画したようだが長く続かなかった。

(富田博之)

オプティック オリバー・オリバー Oliver Optic 一八二二～九七 アメリカの児童文学作家、編集者。本名ウイリアム・ティラー・アダムズ。『The Boat Club ボート・クラブ』(一八五四)を皮切りに、道徳と娯楽を盛り込み、数多くの旅と冒險の物語を書いて、当時の少年たちの血を沸かせた。代表作は、向こうみずな少年たちの船上生活を描いた『Outward Bound 外航』(六七)。いくつかの児童雑誌の編集にも従事した。(原昌)

オプラスツォフ セルゲイ・B セルゲイ・Bラジーフ
Сергей Владимирович Образцов 一九〇一～ソビエトの人形劇の指導者、演出家、俳優。最初絵画を学び、一九二〇年に人形劇をはじめ、その後俳優としてモスクワ芸術座などの舞台に立ち、三一年に人形劇団を創設、三七年にモスクワに開設した中央人形劇場は、大人向けと子ども向けの豊富なレパートリーをもち、併設の人形博物館とともに世界的にも有名になっている。人形劇の理論的著作も多く、舞台装置と人形操作に新機軸を生み出した。七六年からウニマ(国際人形劇連盟)会長。

(中本信幸)

おもちゃ絵 おもちやえ 江戸中期から大正初期にかけて流行した各種の少年少女向け実用錦絵を指す総称。絵双紙ともいう。語彙としては、さほど古いとはいえないが、児童出版の一ジャンルとして、少なくとも宝暦年間(一七五一～六四)、あるいはそれ以前の時代にさかのばるとみてよさそうである。その名称から「おもちゃを題材にした絵」と誤解する人もいるが、絵本や教材になるもの、ゲームとか切り抜き細工などを一枚の場合によつては、数枚一組の紙面に割り付けた刷り物のことである。初期のものは白黒で、比較的素朴であったが、一八世紀後半に多色刷りの技術が開発されると、他のジャンルの木版出版物と同様急速に普及し、一層華やかに、かつ多面的に発展した。まず上方でつくれられ、のちに江戸でも発行されるようになつたと思われるが、定かではない。いずれにせよ、関西と関東でそれぞれ異なつた様式のおもちゃ絵は、大正まで続いた。全盛期は寛政のころから明治中期まで、テーマと形式は千差万別で、そのまま絵本の代わりに鑑賞できるもの、折つて豆本になるもの、切り抜いて着せ替え人形とか、人気役者の髪替えを楽しめる歌舞伎人形、からくり絵、「十六武藏」などのゲーム遊び、一種のミニ百科事典ともいえる「鳥づくし」や「魚づくし」など、数え切れないほどの種類があつた。『源氏物語』、歌舞伎や人形淨瑠璃の名作、軍記もの、昔説や「二十四孝」

などの訓話、その他の文芸ジャンルからも、多くの主題がおもちや絵に取りあげられた。また、猫、狐、ねずみの生き生きした擬人絵は、現代の絵本を先取りする部分が多くた。有名無名を問わず、江戸後半から明治までの浮世絵派の画家たちは、ほとんどすべて、おもちや絵のデザインを試みたが、とくにこれを得意とした画家には、渓斎英泉、歌川芳藤、梅堂国政、長谷川貞信などがある。

(アン・ヘリング)

オルコット ルイザ メイ Louisa May Alcott
 一八三二—一八八五、アメリカの作家。教育家で社会改革論者であった父親エイモス・ブロンソン・オルコットの次女として、ペンシルバニア州ジャーマン・タウンに生まれる。父親の理想主義的な生活姿勢のゆえに一家は貧困の中に各地を転々としたが、そういう中にもルイザは当時のアメリカの思想家H・ソロー、R・W・エマソンに影響されて育っていく。独学によって身についた深い感性を通して早くに物語を書きはじめ、それらは『Flower Fables 花物語』(一八五四)として出版され、オルコットの作家の道へのきっかけとなる。一八六一年の南北戦争の勃発に伴って、一時従軍看護婦となり、その時の見聞きを手紙にしたためたのが土台となつて『病院のスケッチ』(六四)が発表される。文筆家・作家としての方向が決まるのは、この作品によつてである。この作品は病院での負傷兵の姿を微細に描いてある。

写すことによって、戦争の残酷さを世に知らしめる役目を負う作品となつた。この後発表された成人小説『Moods むら気』(六五)の評判はあと一歩で、作家としての行く末に不安を感じる一時期を過ごした後に訪れたのが、本格的な子どもの文学への誘いだつた。出版社に強く勧められて書いた『若草物語』(六八)が思いがけなくもオルコットを当代随一の児童文学作家に押し上げる結果になつた。

マーク家の生活のありさまを克明に描写したこの作品は、とくに両親と四人の姉妹たちとの関係に焦点をあて、作者の少女時代の生活と思い出を多分に反映している。そして、それぞれの人物の性格描写もさることながら、家庭という枠の中で自らの個性を伸ばしていく姉妹たちの生きざまの描出はすばらしく、中でも主人公ともいうべき躍動的な次女ジョーの像は、当時広まりつつあつた女性解放の波をみごとに象徴させている。家族を構成する人間たちの役割と思いやりとを描きぬいたこの作品は、当然ながらアメリカ児童文学の家庭小説の分野を切り拓く嚆矢となつた。『若草物語』の第二部『続 若草物語』または『良妻物語』(六九)は成人した四姉妹が出会う起伏ある生活を前面に押し立てながら、中心人物ジョーの心の動きを深い視点で捉えている。父親が実現できなかつた教育理念を具現化したのが、次のマーク家の物語『第三若草物語』

または『少年たち』(七一)である。ここでもオルコットの少女時代の思い出が浮き彫りにされている。マーチ家の物語の締めくくりとなつたのが、『第四若草物語』または『ジヨーの子どもたち』(八六)である。前作で登場した子どもたちのその後の生きあまが描かれているとともに、この作品には男女平等についての作者の理念が反映されている。これらの作品に並行して、オルコットは数編の大作向けの小説のか、子ども向けの多くの物語を書いていて、中でも『Under the Lilacs ライラックの花の下』(七七)、『Jack and Jill ジャックとジル』(八〇)は忘れられない。(足松 正)

オルセン イブ スパンク Ib Spang Olsen 一九二一 デンマークの絵本作家、挿絵画家。王立美術学校に学ぶ。教職につき、のちに挿絵と絵本に専念する。

絵本に『はしれ ちこわらあかんしゃ』(一九五六)、『ぬまばやまのかけづくり』(五七)、『つきのぼうや』(六一)などがあり、すべて詩情豊かな作品である。おやじ、今日の挿絵画家の逸材である。一九七一年受賞の国際アンデルセン賞のほか、数々の賞を受けている。

(山内清子)

オルツィ ヘムスカ Emmuska Orczy 一八六五—一九四七 ハンガリー生まれのイギリスの作家。フェリックス・オルツィ男爵の長女。ロンドンに移住後、画家のモンタギュー・バーストウと結婚し、共

同で子どもの本を発表。やがて、フランス革命を背景とするロマン劇『紅はごべ』(一九〇五)を著し、同年それを小説化して一躍人気作家となる。その後、多くの続編を発表。また探偵小説『The Old Man in the Corner隅の老人』(〇九)の連作も知られる。(足松 正)

オルドリッジ ジェイムズ James Aldridge 一九一八—イギリス在住のオーストラリア人作家。二〇歳でオーストラリアを去り、欧米で新聞記者として活動した後、作家活動に入る。児童書としては、オーストラリアの田舎町での子ども時代を振り返った作品群、『ある小馬裁判の記』(一九七三)、『The Broken Saddle 切れた鞍』(八二)、一九八五年度オーストラリア児童文学賞受賞作の『リリ・スタベックの実話』(八四)がある。

オールドリッジ ルイス・ペイリィ Thomas Baily Aldrich 一八三六—一九〇七 アメリカの児童文学作家、詩人、編集者。『A Ballad of Babie Bell ベイビー・ベルのバラッド』(一八五五)という詩が好評を博し、文筆生活に入る。やがて自分の少年時の体験に基づく『The Story of a Bad Boy 悪童物語』(七〇)を書く。これがマーク・トウェインの『ラム・ヘイヤーの冒険』(七一)、J・W・ペックの『Peck's Bad Boy and his Pa ペックのいたずらっ子とパパ』(八二)などの『悪童物語』の系譜の起点となつた。

(原 昌)

オルファース ジビン・フォン Sibylle von Olfers

一八八一～一九一六 ドイツの女流画家、絵本作家。ベルリンで絵を学んだのち、二四歳の時ケーニヒスベルクのフランシスコ会修道院に入り、リューベックに移つて、カトリックの小学校で教えるかたわら絵の仕事を続けた。自然の一年の経過を擬人化して描いた『Etwas von den Wurzelkindern』根つこの子供たち（一九〇六）が代表作で、その柔らかでメルヘン的なタッチはクライドルフの影響をうかがわせる。

（関 楠生）

オレーシャ ユーリ・K. Юрий Карпович Олеша

一八九九～一九六〇 ソビエトの作家、劇作家。オデッサ市に生まれる。代表作に長編小説『羨望』（一九二七）、ファンタジーの世界の中で民衆の勝利をうたつた魅力的な児童文学作品『二人ふとつちよ』（一八）がある。しかし二作とも三〇年代後半に反革命的と批判され、以後筆を折る。スターリン批判後、名誉回復した。死後に隨想録『Hu дни безструочки』（北畠静子 筆もたぬ日とてなし）（六二）が発表された。

みやすい歌曲を効果的に用いる、より演劇的な音楽劇としてのオペレッタ、（3）現代的な感覚で音楽（声楽・器楽）と舞蹈、演劇のより密接な融合と、多様な様式で表現するミュージカルなどが含まれる。そのほか、もつと素朴な音楽入りの劇もあり、それは、子どもに見せる児童劇、子どもの演ずる児童劇などでは、リズミカルで楽しい音楽劇として、子どもの本性にもかない、広く好まれ親しまれているといえる。我が国の児童演劇の歴史では、嚴谷小波が一九〇五年（明38）に『笑ひ山』『五光の滝』など四編の『お伽歌劇』の試みがあり、一四年の宝塚少女歌劇の第一回公演に歌劇『ドン・ブランコ』（桃太郎の音楽劇、北村季晴作・作曲）や喜歌劇『浮かれ達磨』（本居長世作・作曲）が上演されたことなどが、子どものための音楽劇の先駆となつた。（岡田 陽）

恩田逸夫 いのんだ 一九一六～七九（大5～昭54）児童

文学研究者、教員。東京生まれ。父は明治薬科大学の創立者。恩田の最終職歴は同大学教授。京都帝国大学哲学科の中途で兵役につき、戦後東京大学国文科に再入学。卒業論文「年少文学論攷」以来、近代文学研究の方法を児童文学の上で行う。すなわち賢治研究誌「四次元」の中心にあつて、賢治学の先駆者、プロモーターとして一貫した。在来の聖人宮沢賢治を人間賢治に捉え直したところに戦後のモチーフがあり、研究者にまづな個性的文体はここに根ざすとされる。比較研究の

要から北原白秋、高村光太郎にも及ぶ。原子朗・小沢俊郎編による『宮沢賢治論』全三巻（一九八一）がある。

（宮崎芳彦）

恩地孝四郎

（おんちこうしろう）一八九一—一九五五年明二十四年昭和三十一年

版画家、挿絵画家、書物装幀家、随筆家。東京に生まれ、東京美術学校を卒業。一九一四年、田中恭吉等と詩と版画の雑誌『月映』を創刊、生涯を通じて詩と木版画を制作。一八年、同志と日本創作版画協会を創立、新版画運動の指導者となる。竹久夢二、北原白秋に親近し、両者の著書をはじめ児童文学書をふくんで数百の書物の装幀を手がけ、その集成に『恩地孝四郎 装本の業』（一九八二）がある。詩・版画集に『海の童話』（三四）、童話歌劇集に『ゆめ』（三五）、児童向きの美術論に『人間のつくる美』（四九）など。英米児童文学の翻訳者恩地三保子はその娘である。

（匠 秀夫）

恩地淳一

（おんちじゅんいち）一九〇六年（明治三十九年）昭和五十九年

詩人。山陰の倉吉で生まれる。一五歳の時から童謡をつくりはじめ、「金の星」（童話）「赤い鳥」などに投稿した。一九三五年（昭和十一年）、小春久一郎、木坂俊平らと大阪童謡芸術協会を創立、「童謡藝術」を刊行。六三年、関西歌謡芸術協会を創立、理事長となり「歌謡列車」を主宰した。童謡詩集に『風ぐるま』（一九六七）、『春はどこまで』（六九）、『タンポポわた毛』（七四）など。ほかに詩謡集、民謡集もある。

（尾上尚子）

恩地三保子

（おんちみほこ）

一九一七—八四（大正六年—昭和五十九年）英米文学翻訳家、画家。恩地孝四郎の娘として生まれ、

一九三八年、東京女子大学英語専攻科卒業。五六六年シャーロット・ジェイ『死の月』、五七年モード・ラブレイス『全訳ベッサイの高校卒業期』を翻訳し、以後、ミステリーと児童文学を中心とした翻訳活動を行った。主訳書に、クリスティイ『杉の柩』『満潮に乗つて』（一九五八）、クリスティアナ・ブランド『ハイヒールの死』（六〇）、オルコット『若草物語』（六六）、ワイルダーの『インガルス一家の物語』『大きな森の小さな家』『大草原の小さな家』『プラム・クリークの土手で』『シルバー・レイクの岸辺で』『農場の少年』（七一—七二）、ラブレイス『ベツツィーとティシイ』（七五）などがある。

（三宅興子）

力

ガアグ ワンダ Wanda Gág 一八九三—一九四六年アメリカの絵本作家、版画家。ボヘミアから移民の木